

早稲田応用化学会報

昭和61年 7 月 発行

早稲田応用化学会

目 次

昭和61年 7 月号

巻 頭 言	教育への一提言……………	1
	森田義郎	
総 説	〔新素材シリーズ⑧〕……………	2
	新素材開発の動向	
	藤本瞭一	
(故) 色川御胤氏を偲んで	……………	8
	越原 誠	
ト ピ ッ ク ス	基盤技術研究促進センターの発足……………	9
	本田尚士	
	日米貿易摩擦と自動車……………	11
	上田祥夫	
随 想	膠質土ことはじめ……………	12
	田中 甫	
	プラスチックの夢……………	13
	斎藤儒範	
新 博 士 誕 生	……………	14
職 場 だ よ り	富士写真フィルム株式会社……………	16
草炭会開催される	……………	20
新15回 (40年卒) 同窓会	……………	21
会 員 だ よ り	……………	22
昭和61年度 定期総会	……………	32
会 計 報 告	……………	33
会 務 報 告	……………	34
昭和61, 62年度 役員名簿	……………	35
「編 集 後 記」	……………	36

巻 頭 言

教育への一提言

理 事 森 田 義 郎



日本経済の目覚ましい発展には敗戦直後の農地改革、財閥解体、財産税等による富と階級の均等化、軍備放棄による再生産性の向上等種々の原因があるが、最大のものは教育普及と国民の智的レベルの高さにあるといえよう。寺小屋時代から日本人は教育熱心で、それが明治維新を成功させ、さらに明治の学制を制定させて、その後の国家の進展に大きく寄与した。しかし、長年培われた封建思想が容易に脱脚できず、独善的な神国思想と国際孤立によって悲惨な敗戦となった。戦後の米国式教育制度にはいろいろな批判はあったが、その後の日本の発展に大きく貢献している。義務教育の延長、高専校の昇格による高等教育の普及、自由主義思想と男女平等意識等は国際社会の中の日本を育てるのに必要なことであった。しかし、この教育制度も今日では多くの矛盾を生じ、大改革を要する事態になっている。日本の官公庁や大企業の学歴偏重が原因でやがて受験指向の教育に偏り、偏差値で生徒達を評価するようになった。落ちこぼれた者の中には自己主張手段として暴力化し、イジメやつっぱりで教師の手に負えぬ状態になり、反対に力の弱い者はノイローゼとなって時には自殺する者さえでる。こうした事はどの時代でもみられたが、今日ほど陰惨なことはなかった。人間は1人1人能力や環境が異なっていて、これを画一的に教育すること自体無理がある。小学生では種々な人間に接することは人間形成上有益なことであるが、中学になって学問の内容も高くなると、能力的に似た者達でないと良い教育はできない。クラスの中に教育破壊者がいては、その排除なしには学校教育は成り立たない。不良分子の排除は義務教育上不可能であるし、一方落ちこぼれた者にとっては理解できない教育を義務で何年も強いられては、その間まるで懲役刑のような苦しみであろう。高校進学率が95%にも達している今日、義務教育の有り方は再考されねばならない。できれば中学課程の義務化は外し、一般中学以外に技能、商業、会話等の職業訓練校、さらに早期からの鋭才教育が望まれる芸術、体育、理数等の学校を設ける必要があろう。また一般の中高校、大学とそれぞれに対応する各種学校の間の格差は撤廃して可能な限り教育の多様化を計るべきである。上級校への進学は悪評高い共通試験はやめ、課目毎の資格試験を行えばよい。そして上級学校は入学に必要な課目を指定し、適合者の中から入試等で選抜すればよい。

一方、大学では文部省の束縛が多く、少なからず教育の多様化を阻害している。とくに専門と一般の課目単位数など大学の採択にまかすべきである。中には専門一本槍の大学があってもよい。大卒者の学士号などは廃止して学歴社会でなく実力社会をつくるのが望ましい。現在の大学教育を硬直させている最大の理由は、行政による教育管理と大学内の保守主義および組織である。この改善なしには時代の変化に適應できる軟体質はできない。

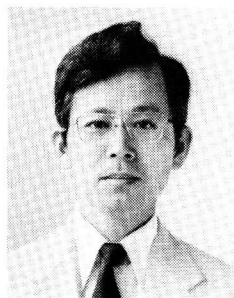
まだまだ述べたいことは沢山あるが、紙数に制限があるので最後に一言加えさせて頂く。日本の将来に最も係りのあるのは教育であり、その合理化と多様化は常に心がけねばならない。こうした事は強い管理を受ける国公立校では無理である。そのエリート意識は税金の優先使用を当然として、学歴偏重をつくり、今後の国家の発展に最も必要な実力社会の大きな阻害となっている。勿論、義務教育や国防、警察、消防、身障者等の教育などは行政の責任で行うべきものであるが、多くの教育機関は育英、研究、施設等に相応の補助金を与えるなら民営つまり私学化した方が遥かに効果的であろう。これらの実現には多大の抵抗のあることは充分分っているが、可能な限り旧ろうを打破して前進することを強く期待するものである。

(早稲田大学理工学部応用化学科 教授、昭和18年卒・旧制24回)

総 説

新素材シリーズ⑧

新素材開発の動向



藤 本 瞭 一

ひと口に新素材というが、実は本当のところ何を新素材というかという点になると、はなはだ怪しいといって良いであろう。巷間、新素材といわれているものを吟味してみると、実態は相当古いものを最近の流行に乗って新素材、新材料と称しているものも少なくない。

私は研究者、技術者として実際の研究現場に立ち合っているわけではないばかりでなく、そもそも今日の科学技術の内容を評価できるだけの知識さえ、かつて応用化学科を卒業したというだけで持ち合わせてはいない。ただ、職業柄、そうした動きの最前線を、それぞれの分野の専門家の方々の意見、評価を基にレポートしているに過ぎない。実は、一昨年の7月から当社（日刊工業新聞社）の紙上で約2年間、「新材料最前線」なる連載を執筆した関係で、今回、この新素材シリーズに書くように指示された次第である。

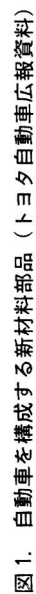
従って、予めご容赦いただきたいのは技術的な点において誤りや不正確な点が相当あるだろうという事である。それはひとえに、卒業以来20年近く（在学中も含めれば20年以上もの長さにわたって）、およそ学術の研究とは関係ない過ごし方をしてきた当然の結果なので今さら弁解するつもりはないが、この中でふれられた話に正確さを欠いた結果、関係者にご迷惑をかけるかもしれないが、それは全面的に私の責任である点をおことわりしておきたい。

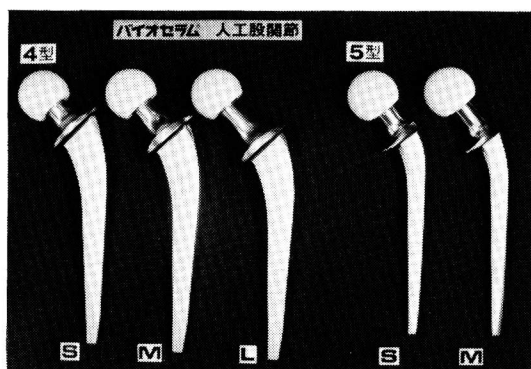
新素材とホビー商品

新素材と巷で話題になっているものをあげてみると炭素繊維、ファインセラミックス、機能性高分子、アモルファス、形状記憶合金、ウイスキーなど様々である。その用途としてはテニスのラケット、釣り竿、おもちゃ、自動車……とこれもまた多種多様である。その中でも、ホビー商品と新素材のつながりには目を見張るものがある。テニスのラケット素材を見ても、私の若い頃は木製（ウッド）ばかりであるが、今から10年程前にジュラルミン（アルミ合金）が登場し、次いで炭素繊維、ボロンファイバー、炭化けい素ウイスキーと次々に新素材が採用されている。

これを炭素繊維という素材から見ると、最初は釣り竿として使われ、次いでゴルフクラブのブラックスシャフト、最近では老人の趣味として広く行われているゲートボールのバターにまで採用されている。ゴルフクラブは高弾性材料としての性質が、釣り竿には軽くて丈夫という点が活かされたのであろうが、ゲートボールのバターともなると、未だその趣味のない私としてはいかなる効用があるかその評価はいたしかねている。しかし、こうしたホビー分野の、価格をものとしめない広範な需要が、わが国の炭素繊維の製造技術を支えて今日の高品質と価格ダウンを導いたのは確か。44年に入社早々、当時、川口支局に配属になって工業技術院公害資源研究所に取材に出かけ、産ぶ声をあげたばかりの炭素繊維を取材したことのある身とすれば隔世の感がする思いがする。

さて、このように身近な新素材ではあるが、こ





アルミナ系バイオセラミックス=京セラ

それを科学的（技術的）に明確化するとすると、変化が激しいだけにその区分化は大変に難しいといわなければならない。最も分かりやすいものは材料ベースの区分で、従来の考え方によってファインセラミックス、機能性高分子、新しい金属材料といった分け方である。これは、それぞれの言葉を見ても分かるようにセラミックス、高分子、金属に、いずれも新しさを強調する形容詞がついただけの区分である。バイオマテリアル、電子材料というふうに用途に応じて語るテーマもある。形状記憶合金や超電導材料のようにその特殊な性質に応じた分類を基に、新素材を並べてもそれは誤りではないわけである。また、アモルファス、超格子膜など、製造技術の変革によって作り出された新素材もある。

定まらない新素材の定義

このように、新素材と言いながらもその内容が説明する人によって異なるのは、新素材を生み出し支えているものが最近の技術進歩であり、それが化学、物理、電気、機械、生物学など多様な分野にまたがる科学の成果と密接に関係しているからである。さらにいえば、こうした諸科学がこれまでの古い区分では最早、現実には追いついて行けずに全ての分野で学際的な領域が新しく誕生していることが、その成果として従来の諸科学の体系ではどのように区分してもそれからはみ出してしまいう技術成果を生み出したといえよう。そして、この技術成果は素材分野においても、何も新素材ばかりに生かされているのではなく、従来の材料製造にも十分反映されている。従って今日、従来の材料そのものも一昔前のものと比べると、“新”

材料と呼べる程、内容が変わっていることも注目して良からう。

そのような事情から、残念ながら新素材を現段階で体系化して説明するのは著しく困難であるように思われる。そこで、新素材を原料の面から高分子（有機）材料、無機材料、金属、複合材料という区分を縦系に、組成コントロールや最近の様々な製造・加工技術を横系にして、現実の利用の仕方を見ることでこのテーマにかえさせていただくことにしたい。

ファインセラに見る新素材の特徴

新素材といえば、その一番目手にあげられるのがファインセラミックスである。ファインセラミックスが何故、これ程に話題になったのかといえ、それは素材としての可能性が大きいとして期待されることはもちろんであるが、通産省が次世代産業基盤技術開発プロジェクトの第一のテーマとして構造用セラミックスの開発をとりあげたことが大きなインパクトになったといえよう。

ファインセラミックスとひと口でいっても、それまでのものは主に電子材料が中心であった。例えば各種のセンサー類に使われている半導体セラミックスなどであり、素材としてはかなり古くから知られているものが使われている。用途としてはサーミスター、酸素ガスセンサー、半導体コンデンサー、バリスター、湿度センサーなどであり、その原料は酸化せず、酸化亜鉛、チタン酸バリウム…など実に多種多様である。

それに対して構造用セラミックスとしてはアルミナ、炭化けい素、窒化けい素、ジルコニアが対象と考えられているわけで、次世代プロジェクトではこの中から炭化けい素と窒化けい素が開発目標とされている。その理由は構造用セラミックスに最も要求されている特性が、金属では急激に強度低下をきたす1,000度C以上でも十分実用に耐える材料という狙いがあるからである。しかし、アルミナ、ジルコニアにはそれとは全く違った用途も存在しており、今のところ構造用セラミックスとしてはこの4つが主力という点では大方の評価が一致している。

構造用セラミックスの場合、最も重要な点はその信頼性である。この信頼性を示すのにしばしば

使われるのにワイブル係数というのがある。これは一つの素材のテストをする時に、例えば百個の同じものを作りそれを破壊し、その時の加重がどのように分布するかを示すもので、ワイブル係数が高いということはごく限られた範囲の加重で全てが破壊されるということになる。使う側からして見れば、非常に丈夫で品質の良いものがある半面、少しの加重で折れてしまうものも混ざっているのでは、ひとつひとつテストして使えるような場合はともかく量産には適さない。そこで破壊強度の範囲内に全体がどうおさまるかを示す目安としてこれが問題になる。

ワイブル係数が高いということはユーザーからすれば信頼性が高いということであるが、問題はどうかすればこれをアップできるかというのが次世代プロジェクトの最大の課題といっても良い。従来の金属のような材料についていえば、一定の条件で作ればまず品質の大きなバラツキはない。それに対して、セラミックスでは非常に大きなバラツキを示す。しかも、そのバラツキも検査手法によって大きな異なり、メーカー側の発表するデー

タが実際に使ってみると必ずしもユーザーにとって確かなものではないという、もう一つの問題点として大きな課題なのである。

そのため、次世代プロジェクトでは原料である粉そのものから出発せざるを得なかった。セラミックスの場合、粉の結晶粒の大きさや形状、極めて微量に含まれる不純物の存在が、焼結結果を大きく左右する。また、焼結方法やその条件をどうするかということも重要なファクターである。従来のセラミックスの場合、原料は天然の粘土であるから、材料を吟味するといっても一定の限界があった。それに対してファインセラミックスの場合は原料から合成することで、最終製品の選択の幅が広がっている。

素材の変化と作る技術の進歩

例を炭化けい素にとってみよう。炭化けい素の結晶構造には立方晶系のベータ型と六方晶系のアルファ型の二種があり、アルファ型はベータ型を1,800度Cから2,000度Cに加熱すると得られる高温型である。現在、市販されている炭化けい

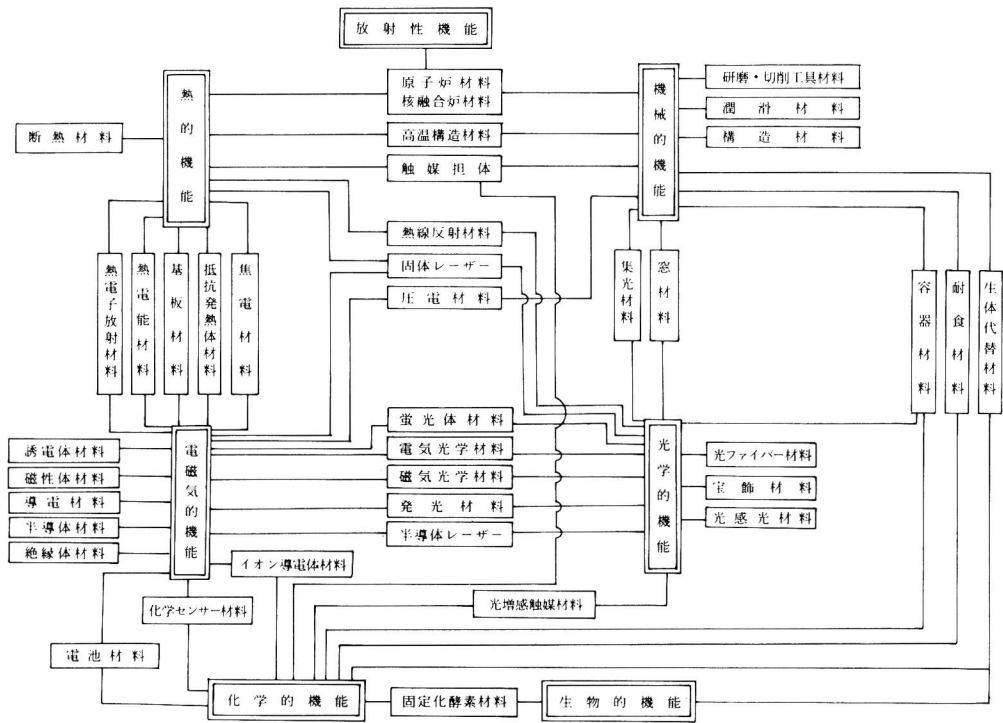


図2 セラミックスの機能と主な用途関連図 (名古屋大学平野真一氏
= 化学工学協会, セミナー資料から

素粉は、①アチソン法で作ったアルファ型を微粉砕する、②けい素と炭素を2,000度C以下、不活性雰囲気中で反応させてベータ型を作る、③1,400度C以下で直接ベータ型を作る、の三種であるが、新しい製造技術として気相反応法、ガス蒸発法、有機けい素ポリマーの熱分解法、エアロゾル法、ゾルゲル法などが生まれつつある。かつては不純物の含有量が数千PPMオーダーであったが、最新の方法、例えばプラズマ分解法を使用すると数十PPMで粒径も数十nmオーダーのものまで作ることができる。

これを使って成型、焼結するにしても、その技術もまた随分と進歩している。単に形を作り焼くというだけではなく、成型するためのバインダーから焼結にしても常温焼結からホットプレス法、最近ではHIPと呼ばれる高温高压法まで形状や用途に応じて使われている。また、素材の評価や検査手法についてもX線CT、光音響法など最新の技術を活用したものが開発されようとしていて、それらがファインセラミックスの普及を支えるものと期待されている。

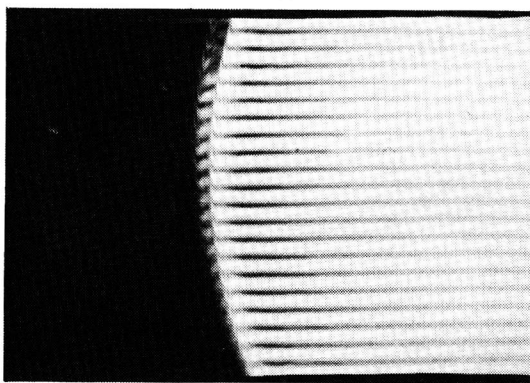
名古屋大学の平野真一教授は「セラミックスの機能と主な用途関連図(=図2)を発表している。これは各種の機能の組み合わせが、実際の用途とどう関連しているかを示したものであるが、こうした素材ベースの種々の属性を組み合わせ発展させることで、用途は限りなく広がる可能性があるのがセラミックスである。さらに、それをこれまでの諸データを基にしてあらかじめ予想しながら開発するという材料設計にまで進もうとしている。そこからファインセラミックスは、精選した原料、化学組成を持ち、成形・焼結条件を十分に制御することによりその特性を十分に発現させたものといえ、これはセラミックスに限らず新素材全体についていえることである。

変わる高分子

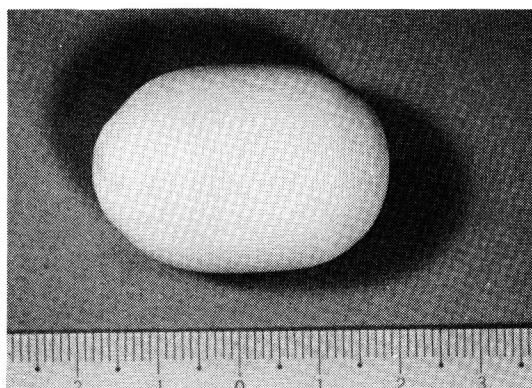
高分子の世界も大きく変わっている。例えば有機半導体がすでに乾式コピーに使用されたり、プラスチック光ファイバーがガラスファイバーの代わりに近距離通信の分野で、例えばLANで使われている程だ。また、人工血管やカテーテルなど生医学材料の分野でも新しいものが続々と生まれ

ており、各種分離膜などは今日、最も注目されているもののひとつである。しかし、基本的には全く新しい素材が生まれたというよりも、従来のものに対して製造技術の進歩で極めて高水準のものが作られたり、様々な組み合わせが新しい機能を生み出しているというのが実情である。

情報化社会の担い手として光通信は中枢をなす技術であり、それを支えるのは光通信ケーブルである。そのケーブルも従来はガラス(石英)ファイバーというのが相場であったが、プラスチックファイバーの性能が著しく向上するにつれて、すでに一部ではとって代わりつつある。光ファイバーにとって最も重要な点は、遠くまで光を減衰することなく通過させるということであり、今日では残念ながらプラスチックはガラスファイバーに一步譲らざるを得ないのは事実である。しかし、その進歩を見るとその結果には驚くべきものがある。ファイバーの減衰に直接関係するのは素材そのものの透光性と、中心部(コア)の真円性である。透光性という点では透明なプラスチックということであるからスチレン系およびアクリル系があるが、今日最も使われているのはPMMA(ポリメチル・メタクリレート)である。初期のプラスチックファイバーは光の減衰率が数千デシベルもあって、とても光通信には使えないような代物であったが、その後、水素原子の一部を重水素で置換した重水素化PMMAを開発するとともに、原料モノマーの精製、重合、紡糸、延伸、巻き取り、ケーブル加工などの製造技術の向上で、実験室レベルでは20デシベルを下回るものが作られている。



プラスチック光ファイバーの
クラッドとコアの境界—偏光顕微鏡
写真=NTT茨城電気通信研究所



テストステロン徐放出した人工睾丸
(日本原子力研究所高崎研究所)

医療分野で期待が集まっている

生体医用材料の分野も高分子の注目されるところである。これにはカテーテルのように治療目的に体内に挿入したり、人工心肺や人工透析のように血液を外部に導き出して異物と接触させるものと、人工臓器などとして可能ならば一生、生体内で使用するものが望ましいものがある。両者に共通して要求されるのはそれが人体に対して有害な物質を出したり、分解して有害な作用をしないことと、血液と接触して血液の凝固を起こさせない抗血栓性である。

一般的に使用するものとしては、プラスチック中に何らかの形で抗凝固剤として知られるヘパリンのようなものを固定化し、徐々に放出させるタイプで良いものが作られている。これはカテーテルなどに使用されるばかりでなく、主要臓器の大手術で血流を遮断する時の血流バイパス用チューブなどにも応用されている。一方、生体内で長期間にわたって使用する人工血管などでは、今のところ太いものとはかく細いものでは凝固を起こしてしまう。そこで高分子同士を共重合させて作るマイクロ層分離なども盛んに研究されているところである。

また、近年、医療技術として薬の投与法の改良が重要なテーマになっているが、そこでも徐放性という手法で高分子材料が期待されている。薬剤の多くは一定濃度を持続させることが必要で、そのためには投与時は濃度が高く、その後だんだんと低下するのではなく、絶えず放出されるような形が望ましい。そのため、マイクロカプセルなど

で消化時間を調節することも行われているが、これではせいぜい数時間が限界である。

急性疾患ならそれでも良いが慢性疾患ではそれでは都合が悪い。そこで高分子中に薬剤を固定化し、それを体内に埋め込んで徐々に放出させるという徐放化が試みられている。この場合、高分子なら重合度を調節することにより放出速度を変えられる。最近、話題になっているインターフェロン、インターロイキン2といった生理活性物質の多くは血液中で酸素の作用で失活してしまうため、注射した場合の有効時間は数分から数十分といわれている。しかし、これらを徐放化して必要量を絶えず補給するようにすれば、全く新しい治療術になりうる。しかも、ポリアミノ酸のように生体消化性高分子を使えば埋め込んでも体内で分解し、後で取り出すというような手間がかからないわけである。これはすでに、徐放化法としてテストステロン（男性ホルモン）を固定化した人工睾丸としてがんで睾丸を除去したケースに臨床的に使用され良い結果をあげている。

おわりに

そのほか、高分子では高弾性率繊維、ポリマーアロイ、高分子分離膜などが注目されているが紙面の都合で言及できなかった。また、ここに紹介した分野で応用化学科の諸先生方が優れた業績を数々あげておられるが、それも省略させていただいた。なお、超電導、形状記憶、アモルファスなど金属材料の世界、それに複合材料の分野も紙面の都合で全面的に省かせていただいたが、それについては別な機会を与えていただいて紹介するということでご容赦願いたい。

(故)色川御胤氏を偲んで

越原 誠

色川御胤氏は私にとっては大先輩であり、とても拙文をもって追悼などとおこがましい事は出来ず、失礼とは思いますが同じ会社に籍を置き、一時は同じ工場にて直接ご薫陶をうけその偉大なお人柄に触れさせて頂き、大きな感銘を受けた者の一人として敢えて一文を捧げさせて頂く次第である。

氏は大正12年早稲田大学理工学部応用化学科をご卒業になり、直ちにキリンビール株式会社尼崎工場に入社され、ビール造りの要である醸造課に勤務され、翌年仙台工場に転勤、醸造からビールを瓶に詰める製品課に移られ、次いで昭和13年、当時の国策により満州の奉天に転勤、現地にてのビール造り、更に朝鮮満州にと転勤され、昭和20年現地にて終戦、昭和22年帰国、広島工場長、昭和31年に東京工場長、取締役就任、高崎工場長をへて昭和41年に退職されるまで、まさに43年間にわたりビール一筋に生きて来られた方である。

その間、戦前戦中戦後の大混乱期をすべて経験され、時には生命の危険も感じられた事もあったそうだが、何よりも大変だった事は転勤の回数が非常に多く、奥様とともにご苦労が絶えなかった事である。しかしそのお人柄から、仕事は厳しいが部下には大変優しくその面倒見の良い事などで、行かれた先々で部下からの信頼が厚く、特に終戦の折はあの大混乱の中を責任者としてすべての事を適切に処置され、全部の部下を安全に帰国させた後にはじめてご自身が身一つでご家族の方とご一緒に帰国されたそうである。これは大変な事である。誰もが一日も早く人より早く帰国したいのが人情である。帰国した部下の人々が異口同音に「色川さん」「色川さん」と感謝の言葉を述べていた事で社内では大評判であった。

戦後は荒廃した製造設備の再建に全力を尽くされ、当社の戦後初めての東京工場の建設に従事され、その初代の工場長として活躍し、この工場の利益によって次々と当社の工場が誕生し、戦後の黄金時代の基礎を築かれた功績は高く評価されている。

昭和41年任期満了に伴い退職された後は、傍系の昭和運輸株式会社の社長となり、昭和46年まで更に後進の指導に当たられた。この時期に驚いた事は、ご自分の意志で自動車の運転免許をとられた事である。普通であればもう年でもありとてもその様な気分になれないと思うが、ご自分の健康の為のゴルフ場通いの為に一念発起された次第である。何時間で免許をおとりになったかはおっしゃらなかったが、我々はそのバイタリティにびっくりすると同時に盛大な拍手を送らせて頂いた次第である。

すべての仕事を引退された後は、ご家庭において悠々自適の生活を送られ、会社のOB会には何時も気軽に出席され、お元気な姿を見せて頂き、又東京工場にも度々お立寄りになり我々を励ましご指導して頂いた。

今年の1月18日、突然の訃報に接しあのようにお元気でいらしたのにと胸のつぶれる思いであったが、ご霊前にてこの偉大なる大先輩のご遺訓を我々が守り、これを後世に伝える事が残された者の務めと悟り、これをお誓いしてご冥福をお祈りしおわかれした次第である。

(キリンビール株式会社東京工場長、昭和26年卒・新制第1回)

基盤技術研究促進センターの発足

本田尚士

(1) 基盤技術研究促進センターの設立

基盤技術研究促進センターは、昭和60年6月公布施行された「基盤技術研究円滑化法」に基づき、60近くにのぼる業界団体、金融界等の代表者を設立発起人として準備が進められ、9月20日通商産業大臣及び郵政大臣の設立認可を得て10月1日設立された。

本センターは、基礎・応用段階における試験研究の実施に当り、民間活力を最大限に発揮・活用するために各種の事業を行うことを目的として設立されたものである。

(2) 基盤技術研究促進センターの主たる事業

基盤技術促進センターは、主として次の8つの事業を実施することを目的として設立された。

- i) 出資事業
- ii) 融資事業
- iii) 共同研究の斡旋業務
- iv) 受託研究業務
- v) 国際研究協力ジャパントラスト事業
- vi) 基盤技術情報提供事業
- vii) 調査事業
- viii) 附帯事業

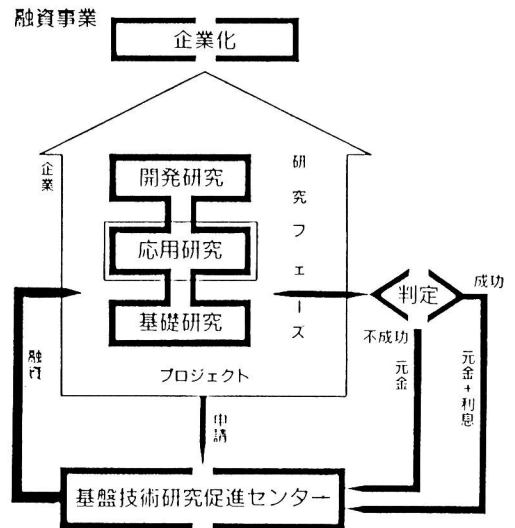
以下これらの事業内容について簡単に紹介する。

i) 出資事業

2つ以上の企業等が共同して行う基礎研究又

は応用研究段階から実施する技術開発プロジェクトなどに対する出資を行う。

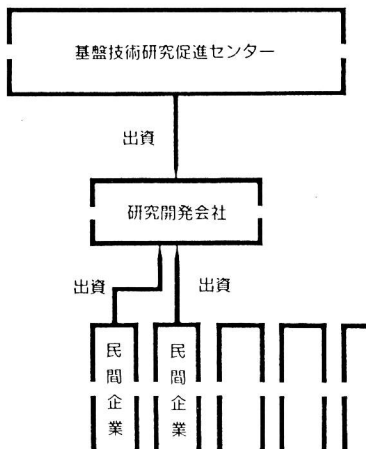
ii) 融資事業



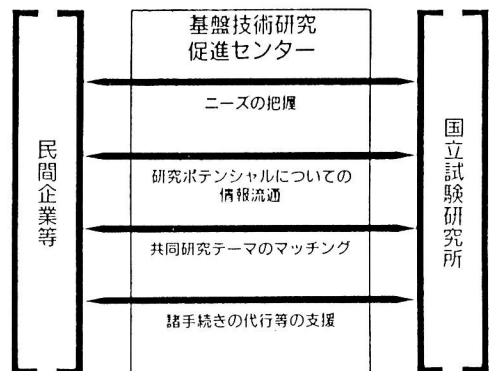
基礎技術に関する試験研究で、主に応用研究段階から実施する技術開発プロジェクトに対する融資事業で、開発終了時における成功、不成功の判定に基づき、元利合計或いは元金だけの返済のいずれかが決定される。

iii) 共同研究の斡旋業務

出資事業



共同研究のあっせん業務



創造工学研究所所長・技術士、労働安全コンサルタント
(昭和27年早大応用化学科卒・新制2回)

民間企業等が、基盤技術に関し、国立研究機関と共同して行う試験研究について斡旋を行い、これに伴う各種のサービス業務を実施する。

iv) 受託研究業務

民間企業等からの委託を受け、産官学の英知を結集した試験研究を実施する。

v) 国際研究協力ジャパントラスト事業

公益信託基金を活用して、海外から優秀な研究者を招へいする国際研究協力ジャパントラスト事業を実施する。招へい費用は事業の目的に賛同する民間篤志家（法人・個人）により設定された公益信託基金の運用益が充てられる。

vi) 基盤技術情報提供事業

国の研究機関の保有する研究情報を収集し基盤技術に取組む研究者に、すぐ役立つ形に編集・整理して提供する。

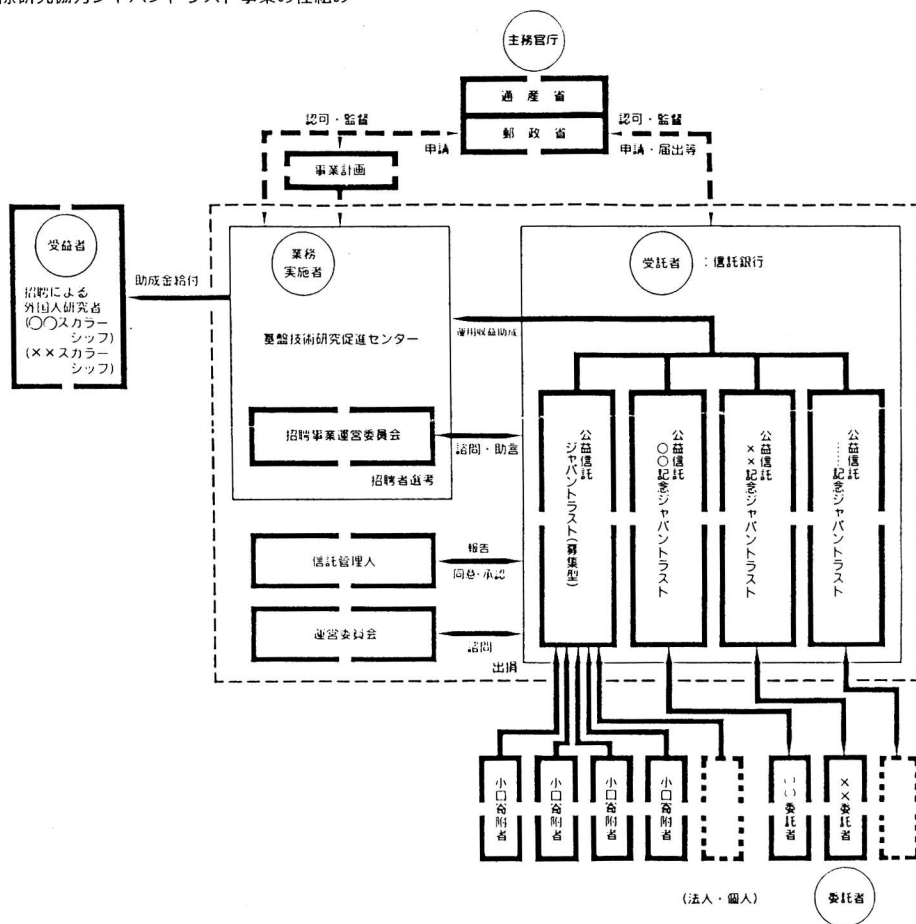
vii) 調査事業

民間における基盤技術研究の促進に役立つ情報を調査し、提供する。

viii) 附帯事業

i) ～ vii) に附帯する業務を行う。(以上)

国際研究協力ジャパントラスト事業の仕組み



くわしい御問合せは基盤技術研究促進センターへ

住 所 〒107 港区赤坂1-12-32

アーク森ビル16F

TEL 03-505-6811

FAX 03-505-6830, 6831

日米貿易摩擦と自動車

上田祥夫

日本の自動車産業は輸出依存型産業であり、その中心となる乗用車輸出は収益の60%以上を稼ぐとされている。又メーカーによっては収益の80%以上を米国輸出より得ていることから、自動車は日米貿易摩擦の主要因に挙げられている。これは日本の自動車が安かっただけでなく、日本のメーカーが米国の市場に合った商品を輸出する努力を行った結果、米国のユーザーにその商品が受け入れられたことを示すものである。

1976年に136万台であった対米輸出車は、1980年には236万台となった。これにより米国車の国内販売が低下し、米国の自動車産業は大打撃を受けた。その為自動車の対米貿易摩擦対策の1ステ

やかされている。

貿易摩擦対策の第2ステップとして各自動車メーカーが精力的に行なっているのが海外現地生産である。米国では全輸出の70%を米国に頼っているホンダが1983年に生産を始めたのに続き、各メーカーが順次進出又は進出を計画している。

ホンダ…オハイオ州で15万¹年²の小型車を生産、現在第2工場（15万¹年²）を計画している。

日産…テネシー州で小型車及小型トラックを生産、1987年には24万¹年²の生産能力となる。

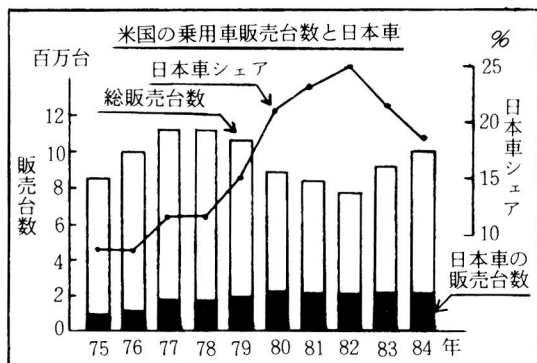
トヨタ…GMと提携しカリフォルニア州で小型車を20万¹年²又中型車を別工場にて生産する計画を持っている。

マツダ…フォードと提携しミシガン州のフォード工場の跡地に24万¹年²の工場を設置する計画がある。

三菱、富士重も現地生産する計画を持っている。

以上の様に現在米国を市場とした自動車産業が生き残るには、日本ブランドの自動車を米国の人間が米国の部品を使い、日本の技術と資金で生産することが必要とされている。今年対米進出を決めた富士重を含めほとんどの日本のメーカーが現地生産を行うとなると、日本車のシェアはますます上昇し次なる保護貿易主義が台頭してくる事は十分にあり得ることである。又現地生産はコスト的なリスクを含んでおり、採算を確保するのは難しい問題である。

これは自動車産業のみでなく、他の産業にも言える事であり、戦後の復興の国であった日本が今や経済大国として自国の利益のみでなく、周囲の国々の利益も考えながら発展していかなければならなくなったことを示している。今後日本が貿易で収益を得ていく為には越えなければならない高い壁である。



ップである輸出総台数の自主規制が行われた。米国の自動車産業は日本の輸出規制の間に、小型車の開発、ロボット化による省力、新鋭設備の導入等の合理化を行ない完全に立ち直っていった。

1985年になると米国は自動車輸出規制を要請しないこととしたが、日米間の貿易不均衡を是正するという貿易摩擦への配慮により、通産省は規制の継続を行なった。この対米自主規制はカナダ、イギリス等の国への輸出に影響を与えた。この様に日本の自動車産業は世界的な保護貿易主義に脅

膠質土とはじめ

田 中 甫

私と膠質土との付き合いは、昭和19年学部2年に戦時の動員で（故）石川平七先生の研究室に配属されて以来である。戦後の混乱の中で暫く新潟に帰られていた石川先生が研究室に戻られ、卒論について私共（中島、長谷川、田中）に、日本の復興はこれからで、火山国日本の火山灰である膠質土は面白い特性を持った未利用資源で、この研究開発を目標に頑張ろうといわれ、研究体制の建て直しから、着々と成果を固めていかれた。24～25年頃には触媒は城塚先生、吸着は横溝先生（工経・現教授）、濾過は伊藤政勝氏（旧31）、化学処理は田中と分担も定められ試薬、装置の不備不足の中を随分努力したものです。

大学と膠質土の関係は昭和の初年に栃木県小金井在のお百姓さんが小林久平先生の許に、不思議な粘土で、よごれをよくおとすとの由で持ち込んだのがそのはじまりで、山本研一先生、石川先生らでその吸着能などを検討され、工化誌にも「小金井コロイド壤土の研究」として投稿されている。以後石川先生が主として引き継がれ「コロイド壤土」の名称であったのが、戦時中に敵性語の廃止で「膠質土」とした経緯を伺ったことがある。

戦後もこの名称で発表を行って来たが、昭和31年に発足した粘土学会に参加し、地質、鉱物、農業土壌などの方々との交流の中で火山灰風化物の主成分のアロフェンが共通の問題として屢々シンポジウムにも採りあげられ、それまでは不明白であったアロフェンの組織構造も最近ではかなり明らかにされて来ている。

一方膠質土の内容も熱又は化学処理に伴う物性や組成の変化から、アルミナゲルを活性表面としていることが判って来た。従って膠質土はアロフェンとその表面にあるアルミナゲルなどを含めて、工業的利用の対象となる原料であるといえる。

一般に関東地方では赤城山より噴出したものを

鹿沼軽石層といい、盆栽用の鹿沼土として有名である。地質年代で新世代第四世紀の終り頃に日本列島の各地で火山から噴出堆積したもので、全国到るところに表土近く層をなして賦存している。その産状により名称はいろいろで、例えば粟土（茨城県）、味噌土（長野県）、水土（鳥取県）、ぼら（北九州）、いもご（熊本県）、音地（四国）などがある。全国を踏査した結果約10億トンに及ぶ量があり、中でも栃木県、鳥取県、岩手県などが層厚もあり量もあることが明らかにされた。昭和30年代の初めに、東洋ファイバー常務の柏木登氏（旧1）が中心となって膠質土から耐火断熱レンガと吸着剤の製造が計画され、同社の稲葉卓也氏（新1）、梅沢浩二氏（旧32）の協力の下、九州耐火より転ぜられた高木正男氏（旧22）も加わり東洋化成という会社が出来、33年10月に北上に膠質土の精製工場と耐火断熱レンガ工場が完成し（この詳細は工化誌62 1696（1959）の技術報文を参照されたい）、別に栃木県真岡に吸着剤の製造工場も運転を開始したのである。その後、該社は全面的に品川白煉瓦に移譲され、また最近新たに発足した品川化成真岡工場で吸着剤の製造が行われている現状である。この間、クリーニング溶剤の精製では白洋舎の研究所長横山鹿之亮氏（旧14）、佐藤一男氏（新5）らのグループと協同研究で輸入品を凌駕する脱酸剤の研究開発に成功し、膠質土が全国的に使用されるまで普及したものもある。

以上の研究開発はいずれも校友先輩の熱心なご協力もあり、卒論生230名の年々の努力の成果で、改めて深謝する次第です。

小林先生以来の粘土研究の伝統は加藤先生、黒田先生に引き継がれ、その末流ではあるが宇都宮大でも今、藤郷森先生（大修12）が液相吸着法による評価法で膠質土の組織の解明や新素材の合成に努力して居り、更に膠質土化学研究会のグループも出来て新たな夢を拓けている。今後の一層の御指導と御協力を願うところです。

プラスチックの夢



斎 藤 儒 範

米国出張し、GM社シボレー事業部の小型乗用車カマロのアセンブリラインを見学してきた。目的は最近米国自動車メーカーのビッグ3がプラスチック・カーを日本自動車メーカーの米国生産車より2,000ドル近く安く売り出し、販売台数が飛躍的に伸びているため敵情視察である。昭和55年、世界一の自動車生産国だった米国が日本の自動車産業に首位の座を譲渡して久しいが、米国ビッグ3は当時を真珠湾攻撃を受けたのと同じ印象を持っていた。確かに首位の座に胡座をかき油断していたのは事実であり、省エネ車、小型車の開発に遅れをとっていただけでなく、労働者のモラルも低下していて、月曜日と金曜日の生産車は買うべからずというユーザーの評判までとってしまった。この屈辱を晴らすため徹底した日本車研究が始まった。当時米国ビッグ3のエンジニアの来日は大変なもので、日本の自動車メーカー、部品メーカーには数人以上の米人見学者が入り込んでいたものだ。その調査研究結果は部品メーカーが完全に系列化され、自動車メーカーと一心同体となり、両者が生産技術と品質管理向上に努めており、多民族系の米国ではとても対抗できない。従ってコスト格差は1台当たり2,000～2,500ドルはつく。王座奪回作戦には日本が弱いプラスチック新素材を使って、ライン革命によるコスト低減しか手がない。日本が米国に自動車生産拠点を作っている間にプラスチックによるアセンブリ・ライン革命を行えば、必らずや日本に勝てると見た訳である。この戦略が功を奏し再び米国が自動車生産王国に返り咲こうとしている。今度は日本が米国車の徹底研究をしなければならなくなったのである。

プラスチック・カーのアセンブリ・ラインで一番変わったことは塗装ラインがないことだ。

通常アセンブリ・ラインで使うエネルギーの半分が塗装ラインで消費されているが、これがないのだ。それにラインに人が殆んど居ない。ロボットは日本で見慣れていて別に驚くことはないが、このラインのロボットは視覚を持っていて、不良品を選別している。ライン構成はプラスチック・フレーム製造から始まり、エンジン、計器類、サスペンション、タイヤ、ガラス類が取付けられ、それだけで走行できるドライバブル・ケージが出来上がる。そのケージにラインの横に据付けられたプラスチック成型機で成型された外板パネルが取付られて行く。金型に着色フィルムがインサートされ、成型されたパネルは光沢のある丁度漆塗りの表面仕上がりである。成型サイクルはラインの組立てスピードに合わせ1分間のショット時間で次々成型されているため、ラインには在庫が全く無い。従来のラインのように鋼板を溶接しモノコック構造体を作り上げ、塗装を数回繰り返して、その外郭にエンジンや座席シート、計器盤を組み込むアウトサイド・インと言われる組立て方法でなく、インサイド・アウトのアセンブリ方法である。これが、プラスチックの採用で初めて達成された夢のラインであり、ライン革命なのである。それを私がこの目で確かに見て来たのである。

以上は何年か先の、多分昭和70年代の某月某日の出張報告であろう。

プラスチックの代表であるポリエチレンが誕生して53年、半世紀余が過ぎ、昨年の合成樹脂世界生産量が7,300万トン、日本で920万トンを生産するまでに到り、今や、プラスチック無しには自動車もエレクトロニクスもあり得ない。最近サーモトロピックの液晶ポリマーが上市され、その種類は複合ポリマーを含め数千種類に及ぶようになった。今後はポリマーそのものが電気を通す導電ポリマーも出現しようとしている。その中で自動車産業におけるプラスチックの位置付けを以上のような夢として捉えてみたが、果して実現するかどうかわかりませんが、(S.61.4.20記)

昭和32年3月 早稲田大学第一理工学部応用化学科卒(新制7回)

昭和32年4月 第一物産(株)入社(化学品部合成樹脂課配属)

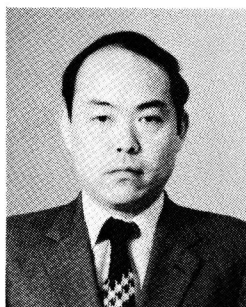
昭和34年2月 三井物産(株)に社名変更

合成樹脂第一部企画開発グループ主席(部長代理)

新博士誕生

論文題目

プラスチック廃棄物の接触分解および改質に関する研究



山本 真

昭和45年 3月 応用化学科卒業
45年 4月 大日本インキ化学工業(株)勤務
49年 3月 大学院理工学研究科修士課程修了
49年 4月 東京都立工業技術センター勤務
61年 2月 工学博士（早稲田大学）

このたび、早稲田大学より工学博士号を授与され、身に余る光栄と感謝しております。これも森田義郎教授、高宮信夫教授、菊地英一教授の御指導の賜と心から御礼申し上げます。

昭和48年の第一次石油ショック以降、世界的に資源の有効利用が大きなテーマとなり、東京都でもプラスチック廃棄物の処理および有効利用の技術開発に着手しました。幸いにも応用化学時代、村井研究室で固体酸触媒を扱った経験があったため、さっそくそれを用いてプラスチックの接触分解を行ってみたのが本論文の発端になっております。その後、昭和53年の第二次石油ショックを経てエネルギー問題がますます重要となり、東京都にも流動層によるゴミ処理プラントが建設されたりしました。昨今は政治的理由もからみ原油の値下がり傾向がみられるものの、技術的には省エネルギー、省資源の要請は強く求められております。また新素材の時代といわれ機能性物質がもてはやされておりますが、汎用性プラスチックの廃棄物を改質して機能をより向上させ付加価値をつけるのも、地味ではありますが重要な仕事ではないかと思っております。

以上のような経過でこの10余年研究に従事してきましたが、未熟で至らぬ点が多いため、今後とも皆様の御指導、御教示を賜りますようお願い申し上げます。

論文題目

ネマチック液晶化合物の合成と物性



高津 晴義

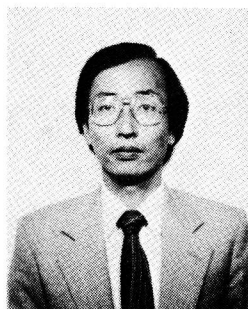
昭和46年 3月 応用化学科卒業
48年 3月 大学院理工学研究科修士課程修了
48年 4月 大日本インキ化学工業(株)入社
59年10月 同社記録材料事業部主任研究員
61年 2月 工学博士（早稲田大学）

このたび早稲田大学から博士号を授与され身に余る光栄と感謝しております。本研究をまとめるにあたり御指導して下さいました佐藤匡教授、多くの御助言を頂いた中村堅一教授、長谷川肇教授、高宮信夫教授、多田愈教授に心から御礼申し上げます。また草炭会にて励ましていただきました村井資長名誉教授並びに諸先輩方に深く感謝いたします。私は初めて液晶電卓が企業化された昭和48年に入社して以来、表示デバイス用のネマチック液晶化合物の合成開発に従事してきました。当初は暗中模索でただネマチック液晶相を有する化合物を見出す目的で合成していました。しかし、数多くの新しいネマチック液晶化合物を合成し、それらの物性を検討することによって、ネマチック液晶化合物の化学構造と物性との関係について知見を得ることができました。さらに合成した化合物のいくつかは極めて有用な特性を示し、現在液晶材料として幅広く使用されています。

液晶表示デバイスはコンピュータ、TV、車載等に用途開発が進み、ますます液晶材料に対する要求が高度化してきております。今後も本研究から得られた知見をもとにして、これらの要求に応える新しい液晶化合物を合成するとともに、各種の表示材料、記録材料の開発を目ざしたいと考えております。諸先生、諸先輩方の御指導の程よろしくお願いいたします。

論文題目

アミノペプチダーゼBの新阻害物質，アルファメニンに関する研究



大内 章吉

昭和48年 3月 応用化学科卒業
50年 3月 大学院理工学研究
科修士課程修了
50年 4月 明治製菓(株)入社，
薬品開発研究所
55年 8月 財団法人微生物化学研究
所，客員研究員
59年 8月 明治製菓(株) 薬品
研究所
61年 2月 工学博士（早稲田
大学）

このたび早稲田大学より工学博士の学位を授与いただき，身に余る光栄と深く感謝いたしております。

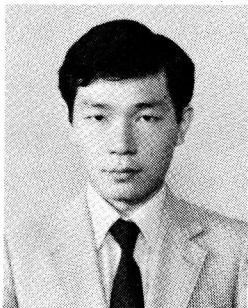
本論文をまとめるにあたりまして御指導，御高配を賜りました鈴木晴男教授，宇佐美昭次教授，長谷川肇教授に厚く御礼申し上げます。

本論文は，細胞表面に存在する酵素の一つであるアミノペプチダーゼBの新阻害物質，アルファメニンAおよびBに関するもので，微生物培養液中から酵素阻害物質を探索する方法および本阻害物質の生産菌の培養方法，さらに本阻害物質の単離精製，構造決定，生合成経路，酵素阻害活性，生物活性，誘導体合成および構造活性相関などについて言及しております。なお本阻害物質の医薬品としての今後の開発を期待しているところであります。

これを機にさらに研鑽を重ね，天然物の宝庫である微生物培養液中から新規な有用生理活性物質を得る仕事を進めて行きたいと思っております。今後とも皆様の御指導，御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

論文題目

晶析による精製分離に関する研究



山崎 康夫

昭和56年 3月 応用化学科卒業
58年 3月 博士前期課程修了
60年 4月 早稲田大学・理工
学部助手
61年 3月 工学博士（早稲田
大学）
61年 3月 博士後期課程修了

この度，早稲田大学から工学博士号を授与され，身に余る光栄と存じ，感謝致しております。これも，豊倉賢教授，城塚正教授，平田彰教授，酒井清孝教授をはじめとした応用化学科諸先生方の御懇篤な御指導の賜と，深く御礼申し上げます。

私は，昨年より理工学部・応用化学科助手に任ぜられ，現在も豊倉研において研究に専念致しております。

本論文は，結晶を析出させ，母液より分離することによる高度分離プロセスに関するもので，結晶が成長，飽和，融解するときの諸現象を解明し，それを有効に利用した操作法を確立しようというものです。ここでは，結晶成長時に不純物が取り込まれ，再び排出される現象，結晶を飽和状態で懸濁させることにより，結晶純度が高まる現象および結晶を母液より分離し，融解する操作時に，不純物が選択的に排出される現象について検討致しました。

このような晶析操作を組み合わせることで，固相中の不純物量が少なく，高純度で高機能性の製品を得られることを明らかにしたので，これより，精製晶析操作条件の決定法・設計法をさらに発展させようと考えています。

この学位取得を研究の一段階と考えまして早稲田大学の名を汚すことなきよう，一層の努力を積み重ねる所存ですので，今後とも，皆様方の御指導，御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

職 場 だ よ り

富士写真フイルム株式会社

1. はじめに

著しい進展を示す情報化社会。そして無限の可能性を有する情報産業。今回は単なる写真用フイルムメーカーとしてではなく、総合映像情報産業の分野で限りなき挑戦をする富士写真フイルム㈱からの報告をいたします。

2. 会社概要

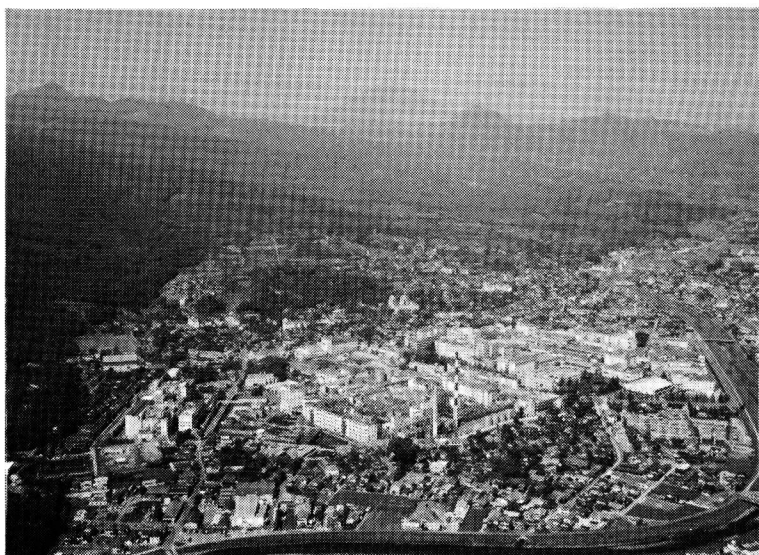
富士写真フイルムは昭和9年に映画用フイルムの国産化を目指して創立されて以来50余年、映像情報記録産業分野を中心に様々な商品を世に送り出してきた。即ち、カラーフイルム・カラーペーパー・カメラなど一般写真用品だけにとどまらずオーディオテープ・ビデオテープ・PS版・感圧紙・感熱紙などのほか最近では富士コンピューテッドラジオグラフィ・富士ドライケム・フジックスTVフォトシステムなどであり、多岐にわたっている。現在資本金約184億円、売上高約6,500億円、従業員数約11,000人となっており、東京本社・6研究所・4工場・9支社営業所・15海外法人及び事務所・15関連会社において活発な研究生産営業活動が行われている。

3. 応化会員の近況

近年、殆んど毎年応化会員が入社してきているために若手層が非常に厚くなってきている。現在総勢22人となっておりその多くが新製品の研究開発の仕事に従事し活躍している。事業場別に会員の状況を報告する。

(1) 足柄地区

足柄というと金太郎が住んでいた深い山の中を連想される方が多いようであるが、足柄事業場は小田原または小田急線新松田からいずれも約20分程の南足柄市に位置している。この足柄地区には写真感光材料製造の中心である足柄工場、同じく研究の中心である足柄研究所、生産技術の開発を



足柄工場：研究所全景

行う生産技術部、および宮台開発センターがある。会員は足柄地区に12人おりそのうちの9人を足柄研究所が占めている。

小野茂敏（新21・藤井研）は10年間インスタントカラーフィルム“フォト라마”の色材開発に携ったのちポリマー素材の開発を担当しており「悪戦苦闘中である」という。同じくフォト라마の開発に入社以来取り組んできたのが鵜野幸生（新21・土田研）、高橋修（新22・篠原研）、富山秀樹（新30・土田研）の3人。活力あふれる組織の中でチャレンジングな目標を達成できた喜びは格別であった。御林慶司（新26・土田研）もカラーネガフィルム・カラーペーパーの商品化に携わり何度かの喜びを経験し最前線で活躍中である。宮坂力（新26・土田研）は写真用ハロゲン化銀乳剤の色素増感の感度向上に関する研究を行っている。「現在の研究グループは大学の研究に比較的近い基礎研究をテーマとするスタッフが集まっているが、足柄研究所の他の研究と同様に明るく活気のある雰囲気包まれている」と彼は言い、最近結婚したこともあって張り切っている。入社3年目を迎えた長岡克郎（新32・篠原研）はカラーリバーサルフィルムの商品化研究に奮戦中である。「入社して約1年、最近ようやく自分のペースで研究を進めることができるようになった。幅広い知識を身につけていく必要性を痛感している」と言うのは解析部門に配属となった前川敏彦（新33・土田研）。足柄研究所で感光材料と関係のないのが、マイクロフィルターの研究開発を行っている江藤雅弘（新32・平田研）である。昨年結婚もしてますます張り切っている。

写真感光材料を支持体の製造からパッケージ加工まで一貫生産を行っている足柄工場では2人が活躍している。岩佐保男（新22・東研）は入社し

てハロゲン化銀乳剤の研究および映画用カラーネガフィルムなどいくつかのカラー感材の商品化を行ったのち、最近フジカラーHRペーパーハイテックを開発し、製造部へ移ってその立ち上げを担当している。入社して1年の岡田哲明（新33・平田研）は製造部において白黒感材の製造技術の研究を行っている。

工場での原料から製品までの諸工程の革新のため、生産技術の開発研究を行っている生産技術部には小野和宏（新26・豊倉研）がいて、のびのびと活躍している。

足柄工場の近くにある宮台開発センターは、当社個有の技術と新しいエレクトロニクス、メカトロニクス等の技術と結合した新しい記録素材やシステムの開発研究を行っている。40万画素のMOS型イメージセンサーもここで生まれたが、応化会員はまだここでは活躍しておらず、今後の新しい活躍の場であると期待されている。

(2) 富士宮工場・研究所

富士宮工場では写真用印画紙の支持体をはじめ多角化の一翼を担う情報記録紙（感圧紙・感熱紙）やレントゲンフィルムの生産などを行っている。印画紙用支持体の品質改良・新製品開発に従事している加藤真二（新31・篠原研）は「忙しいながら充実した毎日を送っている。」

富士宮研究所は高分子科学を基盤とした研究所で、フィルムベース、紙製品の基礎研究のほか新しい感光システムの研究を進めているが、ここで新製品の開発に情熱を注いでいるのは鈴木保（新22・関根研）である。「学生時代の仲間からの音信、或いは入社希望の方は連絡を歓迎する（Tel 0544-26-7624）」そうである。

(3) 小田原工場・磁気記録研究所

各種磁気テープ・フロッピーディスクや化成品の生産を行っている小田原工場、これに隣接して磁気記録材料の基礎研究・開発研究を進めている磁気記録研究所がある。この小田原地区で頑張っているのが江尻清美（新31・逢坂研）。「ありとあらゆる分野の知識が要求される磁気材料の製品開発において、入社3年ですべて自分のものになっているとは言えないが、1つの製品をモノにできたことで自信がついた」と言う。

(4) 吉田南工場

大井川の河口近く、吉田南工場はオフセット印刷用製版材料（PS版）の生産・研究を行っている他、新規事業部門の生産拠点として将来が期待される工場である。この研究所にいるのは小久保忠嘉（新18・佐藤研）と前本一夫（新30・佐藤研）の2人。小久保は15年間足柄で白黒銀塩感光材料の商品開発に携ったが、最近半導体加工分野の材料開発に転業した。「技術革新のテンポの速い分

野だけに、急速な陣容拡大をはかるべく材料技術者人材募集中」との事。前本は入社以来PS版の素材開発を行っており、足柄より移って活躍中である。

(5) 朝霞研究所

埼玉県朝霞市にはじめ中央研究所として設立された朝霞研究所では、感光材料で培った技術を生化学の分野に応用し、特徴ある医療診断システムの研究を行っている。

北島昌夫（新14・篠原研）は入社後しばらくマイクロカプセル技術の応用開発研究をやっていたが、10年程前から新しい血液分析材料（フジドライケム）の開発研究に携っている。北島のもとでドライケムの研究をしている五十嵐健（新31・酒井研）は「新しい商品を作り出すことに喜びを感じている。自由に仕事をさせてもらっているだけに責任も感じ、やりがいがある」と言う。

(6) 東京本社

東京本社において印刷システム関連商品の技術サービスを行っているのは中村泰雄（新23・村井研）である。吉田南工場でPS版の研究を行ったのち東京へ移り実用化研究から技術サービスの分野へと進んだ。「客との接触がある今の仕事が研究よりも向いている。今後は開発・企画へ情熱を燃やしてみたい」と意欲的である。



朝霞研究所

(7) その他

今年入社したばかりの出石忠彦（新34・篠原・西出研）は現在新入社員研修中でありもうすぐ配属が決まるところである。これからの技術者は化学という一つの専門領域だけでなく複合商品をまとめていけるだけの総合的な科学の知識・センスを求められており、市場ニーズに対する感性も養わねばならない。フレッシュマンとしての活躍が期待されている。

長い間生産技術部において、富士フィルム製品の包材加工技術を一手に引き受けて商品をまとめてきた河田正（新6）は、昭和58年にフジマイクログラフィックス社に移籍になり、取締役技術部長として活躍中である。

また応用化学科の大先輩であり応用物理学科の助手を勤められたのち昭和30年に入社、写真用ベースなど高分子材料の研究・新規事業開発・中央研究所の設立などに中心的役割を果たされたのち足

柄工場長代理、富士宮工場長、小田原工場長を歴任された矢野泰氏（旧29）は惜しくも病魔に犯され昭和50年秋急逝された。

4. おわりに

イメージングテクノロジーを基盤に、一般写真分野から磁気材料、電子映像、医療情報システム、印刷システム、オフィスオートメーション、産業材料分野へと事業の翼を広げ、富士フィルムは昭和65年度に一兆円企業の実現を目指した「V-1」計画に入っている。イメージサイエンスから広がる限りなき夢。21世紀の新しい未来社会に向けて富士フィルムの事業は、この無限の可能性を秘めたI & Iの世界、すなわちイメージング（映像）とインフォメーション（情報）の世界を舞台として繰り広げられることになる。我々応化会員一同も仕事を通して自らも成長するよう頑張っていきたいと思う。

（文責 鴈野幸生）



草炭会開催される

— 村井先生の喜寿の祝いも —

草炭会は旧村井研究室と藤井研究室のOBが中心となって、村井先生を囲んで親睦を深める会です。先生の研究テーマをとって草炭会と名づけられ、現在会員数250人に上り毎年1月に新年会として、大隈会館に集うのを例としています。

今年は、去る1月20日に村井先生の喜寿の祝いを兼ねて開催され、京都草炭会会長、故藤井修治先生の奥様はじめ、岡山から駆け付けられた大饗先生も含めて50人の会員が集い大変な盛会でありました。

村井先生は、本年の11月22日に77才になられますが、ますますお元気で、東京都教育委員会委員長をはじめとして、色々な分野でご活躍中です。

藤井嘉津子夫人は、早稲田大学本部総長室で100周年募金事務局に事務をとっておられ、今回は、村井先生に会からお贈りした記念品の品選びから、当日の花束贈呈にいたるまで大変なお世話になりました。

浜野裕先輩（15年卒、金属防錆工業社長）の音頭で乾杯の後、諸先輩が次々と立ってお祝いと近況を述べられ、出席者全員、時の過ぎるのを忘れたほどです。ご挨拶の中からいくつかを拾いました。

京都純義氏（15年卒、東洋ファインケミカル社長） 草炭の研究を再開すべし

大饗茂氏（18年卒、岡山理科大学） 小野梓賞を受賞した学生時代の思い出、村井先生との出会い、どうしても究めたいもう一つのテーマがあって、依然として研究を続けている近況など

小野裕二郎氏（22年卒、早稲田大学高等学院） 全寮制の本庄の学院の紹介

百目鬼清氏（26年卒、太平化成社長） 応用化学会の活動紹介と参加の要請

小林宏氏（27年卒、日本超低温社長） 根岸でLNGの冷熱利用でマグロを預かっている近況など

その他、出席者全員の近況をお伝えできないのが残念ですが、お名前だけを以下に記します。（敬称略）
（ ）内は卒業年次。橋爪惟公（14）、鈴木貞二（16・3）、岩崎馨（16・3）、小場豊次（16・12）、栗山秀弥（16・12）、寺西恭（16・12）、木下巖（16・12）、宇田川朝司（16・12）、兼松貞雄（17）、猿井喜一郎（有）、牧野隆明（21）、倉林正弘（21）、伊藤輝夫（25）、藤沼茂（26）、小嶋淳一（28）、八嶋康（31）、川上敞（31）、門脇芳雄（31）、横溝清治（32）、尾沢正也（32）、寺内淑晃（32）、金子譲（33）、中井弘明（34）、小山達夫（34）、矢崎文彦（35）、小林尚吾（35）、堀内弘雄（36）、山口達明（38）、萬肇（39）、加藤匡紀（43）、森吾一（44）、廣谷修（44）、山本真（45）、内海諭（45）、門倉正博（47）、森康郎（50）、角田裕孝（50）、中沢俊一（51）、竹内亮（51）、岩田利枝（51）。

この他に、寄付を送って下さった方も10名ほどいらっしゃいました。

最後に、事務局および当日の司会役として高宮先生に、受付役として研究室の学生諸君にお世話になりましたのでこの場を借りましてお礼申し上げます。

（萬 肇 記）

新15回（昭和40年卒）同窓会

卒業後20年経過し去る3月8日（土）に学年担当の森田先生をお迎えして、京王プラザホテル・オリオンの間で同窓会を催したところ、地方からの出席者を含め22名の参加を得て賑かに行うことができました。20年ぶりに再会した顔もすこし皺がふえ、頭も立派になった以外は変りなく卒業当時そのままといったところで、懐かしく談笑し時の過ぎるのを忘れる程でした。一線の中間管理職としての悩みやジレンマも話題に上り、皆それぞれの場で活躍していることがうかがいしれ、考えてみれば大学在学当時の年齢と同じだけの時間が経過したのだとの感慨無量でした。

受付番号6番の人に開会の挨拶をしてもらおうということにしていたら、はからずも当日出席者の中で一番出席番号の若い有居君にあたり、まず順当なスタートを切りました。当日の出席者は次の22名でした。

有居、五十嵐、井上（徹）、池田（旧姓脇田）、大塚、大山、太田、金子、小池、酒井、更級、沢崎、美川、田中、竹内、寺瀬、中沢、西村、比留間、藤宗、松下、渡辺（賢）

多分にウォーカホリック的な働き盛りが集まり、普段着で心おきなく話し合えるのもやはり同窓の誼であり、これからはもっと頻繁にやらないかとの動きもあり、組織人としては一番悩みの多い時期、職務にたずさわっているだけに、少しでもお互いに役立てばということで5年毎の従来のパターン以外に時々やろうということになりました。幹事留任がどうも別の魂胆であったようです。

いつものとおり校歌斉唱、エールでしめくくったわけですが、どうやらオジン世代と言われかねないマンネリぶり、本当に昔にもどった様でした。悪がき連中は夜の新宿に三々五々繰出し、残りは仕事仕事（勉強勉強）で、まるで在学当時そのままでした。

当日は酒井研究室の女性2名が受付等の雑務を引受けてくれ、諸事スムーズに運んだことを感謝します。なお急用で亀井君が直前で出席出来なくなり残念でした。

（文責：太田政幸）



大正14年3月卒第5回生は、私と横浜在住の榎原敏之君との両名だけ。何時まで呼吸し続けますか？

坂田 誠（大正14年卒・旧5回）

二つ程公職を残して、あとはすべて引退しました。元気で過ごしています。そのうち機会を見て母校をお訪ねしたいと存じます。

秋山桂一（昭和4年卒・旧9回）

昭和4年卒同窓生は15名でしたが、現存7名となりました。年に1～2回集まって旧交を温めています。応化会の発展を祈ります。

竹内光雄（昭和4年卒・旧9回）

本年4月18日に81歳になりました。近ごろは目が悪いのであまり外出はせず、自宅で静養しております。

応化会の一層のご発展と、会員の皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

宮本五郎（昭和4年卒・旧9回）

東京工芸大学名誉教授、日本写真学会前会長・名誉会員

昨年9月30日、77歳にて従来の勤務先（保谷ゴム工業 K.K.）を引退して、現在は非常勤で技術顧問をしています。幸い元気で毎日を送っており、やがて7月になると満78歳を迎えることになります。

河野和夫（昭和7年卒・旧12回）

保谷ゴム工業(株) 技術顧問

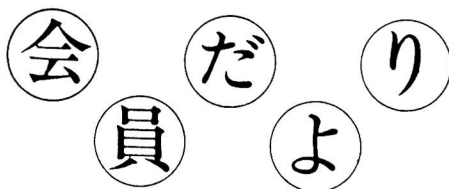
4月2日、関西支部の早桜会に出席した。昭和3年卒の江崎先輩が亡くなり、そのあとは6年卒の木村さんだけが関西在住で、そのあとは我等昭9の5人になってしまった。水科、上杉、由良と私が出席し藤木は来なかったが、久しぶりに4人が顔を合わせた。

川田恒雄（昭和9年卒・旧14回）

いつの間にか75歳を過ぎてしまいました。気持は未だ若いのですが、体の方はさっぱりでガタガタです。

斎藤泰一（昭和10年卒・旧15回）

持病の緑内障が徐々に進行中。近々手術の要ありと宣告され気が重かったところへ、先日ちょっとした不注意で転倒、左筋骨にヒビが入り手当を受けていますが、中々痛みがとれず困っております。



皆さんも怪我にはくれぐれもご注意を。

鷹居頼明（昭和10年卒・旧15回）

特に悪い所も無いが身体の所々に少々故障を感じるが、75年も使用したのだから多少の故障は起るものとあきらめている。

田舎で生まれ育ったせいか最近自然のある所がよくなり、今なお自然が残るハケ岳の山荘に出掛けるのを無上の楽しみにしている。

野鳥の声を聞き山野を歩き回るのは非常に気持ちがよい。また水が非常にうまい、空気も又うまい、これからが一番良い季節である。

堀米耕平（昭和10年卒・旧15回）

生きることの厳しさ、悲しさ、そして楽しさ。これからも生きて行きたいし、また生きて行かねばと思いつゝ月日の経つことの早さに戸惑う。

山科義彦（昭和10年卒・旧15回）

5月には十一会で伊東へ一泊二日の旅行に行きます。しかしだんだん参加人員が減ってきて残念ながら寂しくなります。

小生は只今のところ毎日有楽町まで出勤し、月2～3回のゴルフもやっております。

豊田善雄（昭和11年卒・旧16回）

豊田内外特許事務所 所長

五中一早大一満鉄一三菱重工業を経て現在。

友人知人が私の宝。そのお陰でなんとかやっている。角膜混濁という奇病も老人性か。

東 正夫（昭和12年卒・旧17回）

胃を切除して、アルファクラブに入って5年半。趣味の園芸と孫との遊びに明け暮れております。この年になって造化の生命力の不思議さに驚いております。

矢部 進（昭和12年卒・旧17回）

私共14年卒業の同期生会（ひさし会）の一同、無事元気で毎年春秋に会合し、楽しい一日を過ごしています。

当方お陰様で相変わらず元気です。皆様によろしくご伝言下さい。

川久保勇雄（昭和14年卒・旧19回）

4月5日に卒業45周年記念の“翼会”を桜満開の大隈会館で開催した。皆古希前後のはずだが、元気な顔で11名。齢を忘れて回顧と夢を語り合った。

なお、例会は隔月に大隈会館で楽しく開いている。その世話人は岩崎教授にお願いしてあるから、ご連絡の上で夫人同伴でどうぞ。

(注)、岩崎教授は去る6月1日急逝されました。

鷲淵晴樹 (昭和16年3月卒・旧21回)

㈱真珠宮 代表取締役

卒業して丁度満45年。4月5日に集まる。皆で過去、現在を互いに話したが、それぞれが多難な道であったことを感じる。

今後は自適生活に入り、それぞれ余生を楽しく生きる道を求めているようだ。友人を広く持つことは楽しみであり誇りだと思う。

竹内 孝 (昭和16年3月卒・旧21回)

新宿区福祉センター

つい過日(4月23日)旧海軍燃料専攻者の会(海燃会)に出席のため上京したばかりですから、このたびは失礼します。

降って私事「晴耕漁・雨読陶」の毎日です。

井川一雄 (昭和16年12月卒・旧22回)

風薫る5月ともなれば学校関係、会社関係の会また会で、いささか会疲れが出ます。まだまだ若い者には負けないつもりですが、時にはシルバーシートに席を譲られていささかガックリしている次第です。

寺西 恭 (昭和16年12月卒・旧22回)

赤坂宝石彫金学院 相談役

小生無事に今日を暮らしておられますのも先生方、会員の皆様のお陰と深く感謝致しております。せめて迷惑の掛け方の少ない者になりたいと願っております。

村田健太 (昭和16年12月卒・旧22回)

仕事をしなくなって10年目を迎えました。老いてますます盛んと申し上げたいところですが、年と共に足腰が弱くなりとても上京できませんのでどうぞ悪しからず。

喜多正夫 (昭和17年卒・工経6回)

この度健康上の理由により、医師の勧告を受けて10年間にわたる単身赴任生活に終止符をうち、自宅に戻り勤務は大阪支店とすることになりました。月に会議で2～3回は上京します。大阪支店は、大阪市北区神山町8-1梅田辰己ビル6F(TEL)06-361-3451㈹です。御来阪の節にはお立寄り下さい。

御所秀夫 (昭和17年卒・工経6回)

船橋化成㈱ 取締役会長

2年前に東京理科大学を定年退職し、オーバーホールしていましたが、この4月に現役に復帰し、千葉工業大学に勤めています。既に年齢67歳、いゝ年をして往生際が悪いといわれても仕方ありませんが、大学院設立のためもう一踏ん張りしたいと思っています。

森本源蔵 (昭和17年卒・工経6回)

千葉工業大学 工学部工業経営学科教授

丁度私の講義の日と重なりまして、残念ながら出られません。

4月から5月にかけて隣国の韓国化学会の年會に招かれて行き、この夏には中國に1カ月半招かれています。その間ヨーロッパでの国際イオウ化学のシンポにも行きます。

大饗 茂 (昭和18年卒・旧24回)

岡山理科大学 教授

一度出席したいと思いながら、なかなか思うに任せません。時間にゆとりがありますので、もし大阪、京都方面でお手伝い出来ることがあれば、喜んでさせて戴きます。

多田長定 (昭和18年卒・旧24回)

8年前に淡路島の高校を退職、あちこち高校の非常勤講師3～4年、現在当地で数名の中学生に数学を教えています。物質の構造式、素粒子のことなど遠い過去のこととなりました。しかし早大在学時代手にしたバイブルは、今の私の老後の支えとなってくれています。

春海 浩 (昭和18年卒・旧24回)

戦後40年防災事業一筋で、現在も消火設備のエンジニアリングに従事しています。各方面の技術発展に伴い、防災対策と幅広い知識と新しいアイデアの開発の必要性が痛感されます。

犬塚克己 (昭和18年卒・工経7回)

日本ファイヤーコントロール㈱ 品質管理部長

石川研同門会が去る2月7日(㊦)大隈会館にて開かれ、50余名出席で、昔話に花が咲き旧交を暖めました。毎年石川先生のご命日(2月10日)の前後にこの会を催すこととなりました。先生ゆかりの方々のご参加を望みます。

田中 甫 (昭和21年卒・旧27回)

宇都宮大学工学部 講師

昨年10月から最後のお勤めとして安間香辛料㈱に勤めています。昔の高圧ガス設備運転の経験を生かして超臨界ガス抽出装置(パイロットプラント)の運転をやっています。

西沢 徹 (昭和19年卒・旧25回)

安間香辛料㈱ 横浜工場 嘱託

仕事と通勤に脚が耐えられずタケダ化成(株)を退職、
思考85%の製品開発業務の八千代マイクロサイエンス(株)
に昨年より勤務しています。

西山尚男(昭和21年卒・旧27回)
八千代マイクロサイエンス(株) 顧問

昨年から金沢工業団地内に新たに造った横浜工場に長期出張の形で出向し、現場を預かって来ておりますが、遠いため朝早くから夜遅くまで多忙な日々を続けております。

山中 亨(昭和23年卒・旧29回)
癸巳化成(株) 研究室長

毎日新聞の論説委員時代厚生行政や、環境問題を担当したのが縁となって、埼玉県立衛生短大で社会福祉学を講義(59年4月から)、この4月からは、付属図書館長も兼務しています。

小林貞次(昭和23年卒・燃料4回)
埼玉県立衛生短大 保育学科教授

昨年通産省の化学技術研究所を退職し、一時体調を崩しまして、現在は好きなことをやってのんびり過ごしております。最近は大分健康も回復し、元気にやっています。

椎野和夫(昭和23年卒・燃料4回)

昭和39年新潟地震に遭遇して以来の地震対策の検討は容易に断ち切り難く、これからは石油コンビナート事業所の地震対策を、ハードからソフトにわたって体系化することをライフワークとしていく所存です。今後ともご指導、ご支援の程をよろしくお願い申し上げます。

白崎正彦(昭和24年卒・燃料5回)

長い海外プロジェクト業務からはなれ、現在は受注業務の発注品の工程管理を、パソコンを利用して行っています。かつてのスライドルールや、手回し計算機の時代と比べ、はるかなる時代の進歩を感じています。6月から第二の人生に入る予定です。

伊藤政勝(昭和25年卒・旧31回)
千代田化工建設(株) プロジェクト業務部技術副主幹

昭和61年3月31日付で、東京都立杉並工業高等学校長を最後に公職から退きました(60歳定年退職)。

縁あって下記の所に4月1日から週3日程勤務いたしております。

小田川 裕(昭和25年卒・旧31回)
早稲田電子専門学校 情報処理教育懇談会事務局長

3月に還暦を向かえると共に、36年間勤務した東亜燃料工業を退職し、スチールオフィス家具メーカー専業の共栄工業の技術顧問として学会運営支援活動にも協力し

ております。前者が週3～4日、後者が週2日と頭の切換えが忙しい日々です。

小田部 薫(昭和25年卒・燃料6回)
共栄工業(株) 技術顧問

三菱重工業(株)広島造船所セメントプラント部次長にて60年4月30日定年退職、現在下記「日本プロンプト広島店」を経営。

NEC, EPSN, ROLANDの商品を中心にしてパーソナルコンピュータ、周辺機器、ソフトウェア電気品等を販売しております。

小早川 寿(昭和26年卒・旧32回)
日本プロンプト広島店 代表者

同期の友人達と逢いたいと思います。燃化の諸君、最後の頑張りをしましょう。

皆さんで是非会合したいものです。旨いのは生のウイスキー。松田、山田の両君よろしく。

筒井 弘(昭和26年卒・燃料7回)
東京工業高校 電気工業計測科科长

今年4月半ばに催された日ソ経済委員会の一員として、一週間モスクワに滞在しました。原油の値下がりでありゆる計画が延びそうな雰囲気でした。

当社の業績は円高の影響を受けてどん底。どんな場面に直面しても闘志を失わないことを旨に、力を振り絞っています。

藤田耕平(昭和26年卒・燃料7回)
(株)新潟鉄工所 常務取締役

卒業以来一貫して加工紙勤務、今春5年ぶりに本社から勝田の工場に転勤、すしづめ通勤電車と単身赴任から解放され、田舎の新鮮な空気を呼吸している。

岡田治雄(昭和26年卒・新1回)
日本加工製紙(株) 取締役勝田工場長

3月末にアジア石油(株)役員を退任し、4月より下記のエンジニアリング会社の、業務に専任することになりましたので、今後共よろしくお願い申し上げます。

水野高光(昭和26年卒・新1回)
(株)アデック 副社長

去る3月4日市合成(株)専務取締役を退任し、併せて第一工業製薬(株)を定年退職致しました。なお以後引き続き第一工業製薬(株)に嘱託として勤務致しますので、今後共よろしく御交誼の程お願い申し上げます。

山根壮介(昭和26年卒・新1回)
第一工業製薬(株) 生産本部嘱託

大阪で4年、またまた新聞製作工程から、鉛を追放す

る仕事に取り組んでいます。

吉沢忠一（昭和28年卒・新3回）
朝日新聞社 印刷局

59年6月に定年退職しまして、技術コンサルタントを始めました。在職中に仕事をしてきた東南アジアの国々が主なクライアントで、趣味と仕事を兼ねたのんびりコンサルタント業です。

丸山 古（昭和28年卒・新3回）
丸山技術事務所

お蔭様で元気の毎日を会社の発展に努めております。皆々様応用化学会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

塚本光彦（昭和29年卒・新4回）
モービル石油㈱ 化学品販売部

エレクトロニクス、精密機械、化学、食品、医薬品等の各工業分野で、無塵衣、無菌衣等の需要が高まり、更にそのクリーニングも高度な技術処理が望まれてきました。

白洋舎のD&Bシステムはこの需要に対応して確立されたクリーニングシステムで、クラス100のクリーンベンチで完全バックされ、利用に供されています。

佐藤一男（昭和30年卒・新5回）
㈱白洋舎 取締役リネンサプライ事業部長

たまには出席したく思っておりますが、所用のため行けず残念です。応化会の方も幹事の方々頑張っておられ、何時もながら感謝しております。人づてに聞きますが在学当時の先生方も多くは定年退職され、寂しい限りですが、既に我々も50数歳、会社と我々も伸びるか伸びないかで決る、人生ひとふんばりの現況、世の中厳しく、専門分野の情報を少しでも欲しい今日です。諸兄の御健斗を祈ります。

山内清三（昭和30年卒・新5回）
大平製紙㈱ 取締役技術部長

大阪支店長を3年間勤務の後、東京本社に戻り、日中交流促進のため中国プロジェクトを担当しております。

中国に関心のある方はご連絡下さい。

宇佐美盛爾（昭和30年卒・大修3回）
東燃石油化学㈱ 中国プロジェクト部長

相変らず岐阜の工場に単身赴任中、応化の先輩としては第3番目（S11豊田先輩、S30池田先輩に次いで入社）の入社である当社にあって硫酸、硝酸、肥料、建材、スチレンモノマー、ポリマー、イオン交換膜及びそれによる製塩等のプラント建設、運転、工場管理を経験して来たが、また社内外で色々な人達とも知り合う機会をも得

た。学生時代柔道部に在籍していた事も人生に大きなプラスとなっている、座右の銘「健体康S」

伊藤 諱（昭和32年卒・新7回）
旭化成工業㈱ 穂積工場長

FCC-C₄から、TBAとオクテンを作るプラントの建設を担当しています。本年8月完成予定です。

景山 武（昭和33年卒・新8回）
ゼネラル石油㈱ 堺製油所ブテンプロジェクト

この7月で北海道の道東釧路6年目を迎えます。仕事も大変ですが、日本リーグ加盟のアイスホッケーの方も大変です。

十條アイスホッケーの部長を兼務しており、今年はAクラス入りを狙って頑張っております。皆さんも応援して下さい。

高柳晴夫（昭和33年卒・新8回）
十條製紙㈱ 釧路工場原質部長

この4月から当地（坂出市）へ参りました。コスモ石油㈱四日市製油所で、3年間環境保全の仕事に当たっておりましたので、その経験を生かして頑張っていきたいと思っております。

二見貞三（昭和33年卒・新8回）
アジア共石㈱ 坂出製油所環境保全部長

本社勤務（日本鉱業㈱石油安全対策推進本部事務局長）から現職に移って1年10カ月になります。日本一小さな石油精製工場のサバイバルと、更には発展のため、日夜楽しい苦労を重ねているところです。学校にはここ10年1回伺った（それも講演会）だけですが、よろしく。

渡辺恵嗣（昭和35年卒・新10回）
日本鉱業㈱船川製油所 副所長

昨今の石油業界をとりまく環境変化が余りに大きく、化学部門も振り回されております。このような時こそ諸先輩はか同窓の方々のご意見を賜りたいと願っております。

諸先生方のご健勝を祈念しております。

中西克夫（昭和36年卒・新11回）
三菱石油㈱ 化学品部次長

今年の4月に高砂から東京へ転勤しました。鉄鋼業は今、生産が振るわず苦しい経営です。

新しい事業展開を試みているのですがこれもうまくいくやら・・・。

今回鉄鋼協会の熱経済部会があり、5月22日～23日千葉に行っております。

堀内弘雄（昭和36年卒・新11回）
新日本製鉄㈱設備技術本部 熟技術給括室長

高分子新素材の応用による電子部品、電子デバイスの開発を担当しています。

長谷川和正(昭和37年卒・新12回)

三菱油化㈱ 電子機材部副主幹

再度関西に赴任し、はや5年目に入りました。東京では味わうことの出来ない関西独特の生活の余裕を味わっております。

井上成之(昭和37年卒・新12回)

昭和電工㈱大阪支店 合成樹脂部

本年1月16日付で久し振りに工場勤務に戻り、現在単身赴任で四日市に在住しています。ゴム薬品(老化防止剤等)の製造、石油潤滑油添加剤の製造及び研究を担当しています。

平川揚二(昭和37年卒・新12回)

三菱モンサント化成㈱ 四日市工場 製造第2部長

鹿島工場にきて7年になります。赴任したときは家族3人おりましたが、子供は学校で東京へ帰り、1人減り2人減り結局単身赴任になりました。当地は季節的には大変めぐまれております。37年卒の応化のクラス会をたまには開いて下さい。皆さんによろしく。

深津輝雄(昭和37年卒・新12回)

信越化学工業㈱鹿島工場 環境保安部環境保安課長

私共ビール業界もやっと明るさをとり戻した感があります。昨今はやっと本筋に戻り、品質での勝負になっており、我社も今年より大改革を行ないました。是非おしいくなったアサヒビールを御賞味下さい

堀内 剛(昭和38年卒・新13回)

アサヒビール㈱ 柏工場

3月上旬に20周年同期会が開催される旨ご案内がありましたが、ブラジル、アメリカ出張で出席できなかったことが残念です。

幹事さんご苦労さんでした。

岩谷和俊(昭和40年卒・新15回)

三菱化成工業㈱ 製造3部 課長

昨年12月末坂出から黒崎に転勤となりましたが、今はやりの単身赴任となり、10数年振りに寮生活を楽しんで(?)います。昔の寮と違って同じ境遇の単身赴任者が多く、若い寮生諸君とは親子の違いのものもあり、和気藹々とやっています。

服部英昭(昭和40年卒・新15回)

三菱化成工業㈱ 黒崎工場力黒課長

宇部興産と丸紅のJVであるATC,INC.の社長として米國TN州に赴任しました。

宮本利雄(昭和40年卒・新15回)

宇部興産㈱

昨年久し振りに同期会に出席し、旧交をあたためました。

今年こそ出席しようと思いましたが、社用にて欠席します。(残念です。)

月1回早大システム研(JPICS)へ通っています。

君塚洋司(昭和41年卒・新16回)

キリンビール㈱ 製造部部長代理

研究所に所属しながら、研究らしい研究もせず現場に歩き、実基の試運転立合いをしている間に、いつのまにか20年!!

(財)天然ガス導入促進センターにおけるSNG発生技術開発について、森田先生と菊地先生と一緒に仕事をさせていただいています。

戸井田 努(昭和41年卒・新16回)

日揮㈱ 衣浦研究所開発研究第1部マネージャー

自動車、家電製品に使われる防錆鋼板の開発、実用化に毎日苦勞を重ねています。

君津製鉄所へ来て8年になり、近く転勤があるのではと考えています。東京転勤になり、皆様とお会い出来ることを楽しみにしています。

野本暢夫(昭和41年卒・新16回)

新日本製鉄㈱ 君津製鉄所冷延部メッキ技術室長

5工場ある生産本部のスタッフ部として、ファイン化、多様化に対応した新しい生産方式、品質管理のあり方などについて模索しているところです。

宮岡 寛(昭和41年卒・新16回)

旭電化工業㈱ 生産管理部課長

石炭の利用と環境問題について、毎日考えています。当日は大阪出張のため欠席させていただきます。

臼井洋造(昭和42年卒・新17回)

東京ガス㈱ 鶴見工場管理室長

第83回有田陶器市を目前に控え、その準備に気忙しく動きまわっております。

今は昔明治29年風薫る頃有田へ来られたお遍路さんに、手土産として有田焼を差しあげたり、買っていただいたりした事が始まりだと聞いております。今では100万人の人が1万5千人の小さな町に期間中(4/29~5/3)訪れる大行事です。

梶原茂弘(昭和42年卒・新17回)

陶芸しん窯 専務取締役

60年11月にメキシコシティに転勤、4~5年の予定で

外地勤務になりました。家族も本年3月引越して行きました。

現在は長女（5年生）次女（1年生）日墨学院に通学中、長男（2歳）は家におり、留守宅は妻の父母が住んでおります。（義父代筆）

渡部芳実（昭和45年卒・新20回）
丸紅㈱

埼玉工場（北足立郡伊奈町）に昨年10月にグループごと移転し、従来どうり液晶材料の開発に従事しております。

高津晴義（昭和46年卒・新21回）
大日本インキ化学工業㈱ 記録材料技術1グループ課長

今後ますます、電気と化学の協力が不可欠の時代になると考えます。

5月末は例年、役員をしている国際学会のため、米国出張いたしますので欠席させていただきます。

飯田康夫（昭和46年卒・新21回）
日本電気㈱ マイクロエレクトロニクス研究所主任

自動車会社から、ゆかた染めに変わりました。大変忙がしい毎日を送っております。

この時期、ゆかたの型紙を買いに行くため欠席いたします。

米重哲彦（昭和46年卒 新21回）
清水染工㈱ 専務取締役

現在、カーボンブラック、シリカ等ゴムへの充填剤の基礎研究をしております。

タイヤ材料というある程度完成した物を扱ってはおりますが、少しでも最先端の技術を取入れたいと思い頑張っております。何か面白いお話がありましたらお聞かせ下さい。

竹下道孝（昭和47年卒・新22回）
㈱ブリヂストン 材料開発第2グループ

60年4月に下記の如く京都工場へ転勤になり家族4人移転致しました。御無沙汰勝ちになりますがおゆるし下さい。

加藤 真（昭和48年卒・新23回）
大日本印刷㈱ 京都工場PM課

私は逗子市の池子に住んでいます。米軍住宅建設問題で揺れている「池子の森」は野生の動植物が、自然のままの生態系を保って生存している貴重な自然の聖域なのです。

自分の住む町のことは上からの押し付けでなく自分達で決めるべきであること、そして自分の町の大切な所は自分達で守り抜かねばならないことを、先輩、後輩の方々にも是非ご一考して頂きたいと思います。

西川和子（昭和48年卒・新23回）
特許庁 審査官（審査第4部・応用化学）

石鹼、洗剤等を製造していますが、競合が激しく、オリジナリティのある商品開発に精を出しております。

西本 博（昭和48年卒・新23回）
東邦油脂㈱ 専務取締役

5月から厚木の森の里から下丸子に出向します。

田舎暮らしから都会に來ましたので、交友を深めるチャンスも生れましたのでよろしく。

三浦 協（昭和48年卒・新23回）
キャノン㈱ 中央研究所主任研究員

3年目となる四日市には春ののどかさもいっぱいとなりました。

円高の影響を心配しながら、モレキュラーシーブを造る毎日です。

長沢邦秋（昭和49年卒・新24回）
ユニオン昭和㈱ 四日市工場製造課長

一度総会にも出席し、OB諸氏と親交を深めたいと存じますが、東京近辺より離れた勤務が長く、残念に存じております。

古川良信（昭和49年卒・新24回）
横浜ゴム㈱ 第一製造技術部課長補佐

技術が真に大切な時代となり、研究所のみならず工場には工場の、研究の種があるようです。

唐沢昌彦（昭和50年卒・新25回）
味の素㈱ 東海工場技術室

石油開発関連産業に従事しております。欧州北海地域を担当しておりますが、昨今の原油価格急落の影響をもともに受けて苦戦をしいられています。

鳥羽博司（昭和50年卒・新25回）
三井海洋開発㈱ 営業第2部主任補

軌道計算の実習で、誰よりも出来の悪かった私が、あのコンピューター端末と毎日向かい合っています。データバンクとか、データの集積とか言われますが、裏へ回ればひたすらデータを入れるのみ、表で使える人には判らない世界におります。

櫻井範彦（昭和51年卒・新26回）
鐘紡㈱ 化粧品技術開発センター第4開発室専門員

4月よりコスモ石油として丸善大協が、新たなスタートを切りました。エネルギー企業として頑張りますのでよろしく！

湯本 貢（昭和51年卒・新26回）

コスモ石油㈱ 中央研究所プロセス研究室

最近私の周辺では英会話がブームを乗り越えてフィーバーとなっています。およそ海外とは縁の薄いと思われる当社ですらこの有様ですから、他社ではどんなだろうかと思われます。

学生諸君、くれぐれも英語を軽んじないように。さもないと私のように後で苦労しますよ。

久保田宏明（昭和52年卒・新27回）
東京ガス㈱ 工務部生産課係長

いつも感じることなのですが、総会はいつものウィークデーの夕方からなのですね。会員全てが都内もしくはその周辺に住んでいる（勤めている）とは限りません。私のように地方会員は対象外ならばそれで結構ですが、より多くの会員が出席出来る機会を、たまには設けたら如何でしょうか。

飛奈源三郎（昭和52年卒・新27回）
共和レザー㈱ 技術部第1課主任

半導体技術は、先端技術の1つの代表的なものとして称されたりしますが、半導体業界は、品不足が続発する好景気と、その反対の大不況とを絶えずくり返しているようです。

今年は、景気がよくなりそうです。

坂口 博（昭和53年卒・新28回）
日本テキサスインスツルメンツ㈱ 特許部

10年前に並木先生や斎藤先生の量子力学や統計力学を他学科聴講に感動し量子化学の研究室を選んだ時、「この分野は将来必ず実用化される。」との信念がありました。フランスでPh. D.をとったあと、企業とは縁のない人生かなあとと思いつつ帰国して、分子研に3月までおりました。今や時代が変わって「分子設計」を目指すには、アカデミックな所よりむしろ企業の方が力を入れており、会社員となって実に充実した機会を与えられています。学部生の方々目先の流行で専門を決めないで下さい。

中村振一郎（昭和53年卒・新28回）
三菱化成工業㈱ 総合研究所
システムセンター情報化学研究員

この4月より厚木工場から東京の技術開発センターに転勤になりました。これを機会に新たな気持ちで頑張ろうと思っています。

池田真一（昭和54年卒・新29回）
ヤマトラボテック㈱ 技術開発センター

転職してからもう4年になろうとしています。やはり本来の技術者より、今の化学品輸入販売という技術のバックグラウンドを生かした職種は、向いていたようです。

また外資系なので、英語の能力も要求されるので、まさに「ヤリガイ」を感じているところです。もう今年は30歳になります。

大沼敏夫（昭和54年卒・新29回）

アイ・シー・アイ・ジャパン㈱ 化学品部第4課

昨年7月に所属が変わり物を作るだけの立場から、需要家とのつき合いが多い立場となりました。輸出担当だけに海外出張がありそうです。英語力の無さをつくづく後悔しています。

木村賢一（昭和54年卒・新29回）
日本鋼管㈱ 管理部薄板製品技術室

今は西ドイツのハンブルグに滞在しております。北海道より寒い所だそうです。やはり日本が一番良く、早く日本へ帰りたいと言っております。講演会、懇親会は次の出席を楽しみに……と電話で申しておりました（留守宅より）。

土倉 明（昭和54年卒・新29回）
㈱ブリヂストン

3月には次女が生まれ、2人の娘の母親となりました。現在産休でのんびり育児に専念していますが、連休明けには職場に復帰します。果たして私の机は残っているか？

萩原久美子（昭和55年卒・新30回）
日立テクノエンジニアリング㈱
プラントエンジニアリング事業部

入社以来あっという間に4年目に入ってしまった。入社以来取り組んできた仕事はどうやら実りつつある最近です。

何かと忙しい毎日ですが、健康第一に頑張ります。

井上俊弘（昭和56年卒・新31回）
日本ゼオン㈱ 技術開発センター研究員

ここ1、2年は主として中近東を仕事で飛び回っています。

大学には御無沙汰していますが、早稲田応化会の発展を願っております。

佐藤善則（昭和56年卒・新31回）
横河北辰電機㈱ 工事スタートアップ部

2月から部が変わりました。そして4月末から6週間米國3M本社へ長期出張です。米國3Mの技術を体中で吸収して来ようと思います。

相変わらずスキー、テニスに熱中しています。

新井愛子（昭和57年卒・新32回）
住友スリーエム㈱ 技術本部

昨年、会社の合併により勤務先が変わりました。2月には同窓の岡崎明彦さん（55年卒・篠原研）が同じ課に来られ、机を並べて仕事をしています。

新井守彦（昭和57年卒・新32回）
萬有製薬㈱ 学術部学術情報第一課

エンジニアリング会社はこのところの円高、産油國の外貨不足のあおりをまともに受け、技術的な計算設計よりむしろ、コスト面に重点が置かれています。

今では、ORの仕事が主でプラント工場全体のFSをやっています。

新井信之（昭和57年卒・新32回）
日揮㈱ システムエンジニアリング本部

新人の頃の配属先は上場企業（化学会社など）の業績予測、新商品成長予測などの調査、分析の仕事をしました。しかしこの2月1日より経営企画部に転勤となり、当社の経営戦略を練るという、大学時代の知識が余り役に立たない仕事をしております。特に証券会社としてのマーケットリサーチと企業戦略の企画などに携わっています。

就職先として証券会社に興味のある方は私までご一報を。（tel. 283 - 2114（直））

勝股春美（昭和58年卒・新33回）
日興証券㈱ 経営企画部

3月に本社転勤になり、心機一転銀座で頑張っています。仕事の方も開発部という所で、より新しいものを探めて毎日飛び回っています。何かよい種（シーズ）はありませんか。

川添泰晴（昭和58年卒・新33回）
㈱資生堂 開発部開発企画課

大阪に配属となり、はや1年がたちました。工業所は九州出身の方が多く、大阪弁と九州弁の中で過ごしています。

深田 功（昭和58年卒・新33回）
三井東圧化学㈱ 大阪工業所研究部

教師になって4年目に入り、3年生の担任をやっております。教科指導よりも進路指導に忙しい毎日です。東京での生活が懐かしく想い出されるこの頃です。

石井智久（昭和58年卒・新33回）
佐賀県立東松高等学校 教諭

今年3年生の担任をしています。3年間担任としてきて、やっと生徒の気持が少しわかってきた様な気がします。

相賀裕嗣（昭和58年卒・新33回）
都立篠崎高等学校 教諭

京都で社会人となって、はや4年目となりこのやくざ(?)な稼業から足を洗えそうありません。

浅田マリ（昭和58年卒・新33回）
三洋化成工業㈱ 医療産業部

自動車の高性能化が要求される今日、素材開発は大きなテーマの1つだと確信して日夜努力しております。自動車業界では新規な材料を、開発することも重要ですが、特に重要なこととして材料の耐久性、コストが最優先されます。ユーザの皆様に満足 of いく性能、コストを追求したい……と思います。

緒方逸平（昭和58年卒・新33回）
日本電装㈱ セラミック技術部開発課

北九州での暮らしも4年目になりました。時の経つのは早いあとつくづく感じます。学生時代の頃が懐かしく思い出されます。

今年の新社員に早大卒がいますので、私もまだ新米ですが腕によりをかけて、鍛えようと思ってる今日この頃です。

岡部正明（昭和58年卒・新33回）
旭硝子㈱ 北九州工場化学部品曹達課

会報を毎回楽しく拝見させて頂いています。今後とも豊富な学術的内容を希望しております。

高田直人（昭和58年卒・新33回）
帝国インキ製造㈱ 研究所

早いもので、私が社会人となって丸3年が経ってしまいました。今年もまた新人が入ってきましたが、若いと自分では思っているものの付いて行けずに困っている今日この頃です。

溝口徳実（昭和58年卒・新33回）
持田製薬㈱ 薬事部

自分などは全く知らなかった有機酸化物の用途研究をやっています。場所は日本化薬㈱の火薬工場の敷地内です。環境的には仕事には良いのですが、なにせ田舎で刺激が少ないのがもの足りないです。

荒木重雄（昭和59年卒・新34回）
日本化薬ヌーリー㈱ 研究課

9.00～5.36の間机に座って、44人のクラスで授業を受け、週に1～2回テストがありました。小、中学校に居ったような気持で最初の研修を終えたところですよ。

来年の7月まで続く研修は次々と厳しくなるそうですが、加藤研で鍛えられた体力と気力で切り抜けます。

青木順子（昭和59年卒・新34回）
日本 I. B. M. 第3営業本部

今春博士前期課程を修了し、現在新入社員教育を受けております。在学中は皆様にお大変お世話になりましたこと御礼申し上げます。

新井 裕（昭和59年卒・新34回）
日本石油化学㈱ 開発部

今春富士フィルムに入社致しました。現在は営業実習中で、商品の売り込みに忙しい日々を送っております。

出石忠彦（昭和59年卒・新34回）
富士写真フィルム㈱

5月もまだまだ研修が続く、22日は工場実習で青梅に居ります。初任給はもらったものの、職場が決まって働き始められるのは未だ大分先のことになりそうです。

大久保美志（昭和59年卒・新34回）
㈱東芝

根岸製油所の潤滑油課に配属になりました。学生時代とは装置のスケールが違い、分からない事が多くて中々大変ですが、チャレンジ精神で頑張っています。

下村 啓（昭和59年卒・新34回）
日本石油精製㈱ 根岸製油所

工場実習を終え、現在は本社で研修中です。未だ配属先は決っていませんが、大学時代とは違った雰囲気早く慣れるよう努力しています。

新居裕介（昭和59年卒・新34回）
日本碍子㈱

現在、新入社員研修を受けています。学生時代とは違って毎日朝早く起きる生活にも漸く慣れましたが、それでもまだ頭のどこかに学生気分が残っているようです。

福田尚夫（昭和59年卒・新34回）
味の素㈱

只今、広島県大竹市の工場で三交替実習の真最中です。こちらは瀬戸内海に浮かぶ宮島をすぐ横手に、とても環境の良い所です。三交替勤務は肉体的にも精神的にも中々ハードですが、学生時代に養った気力、体力で頑張っています。

6月には研修期間も終り各地に配属されますが、何所へ行っても早稲田マンとしての自覚だけは忘れずに頑張りたいと思います。

藤井秀幸（昭和59年卒・新34回）
三菱レイヨン㈱

スポーツニュース（プロ野球）の中継、野球の中継が主な仕事です。まだまだ勉強しなくてはいけない事が山程あり大変ですが、頑張っています。

堀田 朗（昭和59年卒・新34回）

テレビ朝日 製作技術局 映像部

新入社員として研修の毎日を過ごしております。7月には職場配属になります。

町野 彰（昭和59年卒・新34回）
東京ガス㈱

就職しても周囲に多くの良き先輩が居られるので、安心して社会人になることが出来ました。今後とも諸先輩方よろしくご指導お願い致します。

松岡宏治（昭和59年卒・新34回）
中外製薬㈱ 特許部

この4月1日より週5日、1日8時間、仕事人に変身しております。色々な夢を持てる学生時代と異なり、現実の世界ばかりを目のあたりにする毎日ではありますが、歌って踊れるエンジニアめざして頑張ります。

山元 健（昭和59年卒・新34回）
㈱荏原製作所

5月9日現在、東京研究所にて実習中でありますが、16日からは防府工場で三交替の工場実習に移ります。初月給を頂きましたが、殆どのは既にその大部分を使ってしまうようです。

弓場善雄（昭和59年卒・新34回）
協和発酵工業㈱

現在未だ研修中であり、右も左も全く分からない状態ですが、楽しくやっていけそうな感じが大きいにしております。

吉田龍生（昭和59年卒・新34回）
㈱神戸製鋼所 石炭液化推進室

入社して1年が過ぎ、自分も一人前に母校の応用化学科研究室に我が社の会社紹介などに行く今日このごろです。

65号館のあの何とも言えない香り(?)を嗅ぐと、思わずまた研究室に戻り学生をやりたいくなってしまいました。学生時代は汚なくてしょうがないと思った65号館が、今では懐かしくて仕方ありません。

大池一弥（昭和60年卒・新35回）

シチズン時計㈱ 技術研究所第一部

新入社員気分どころか、大学生気分すら未だ抜け切らないようなまゝに入社2年目を迎えた私ではありますが、早く新入社員の模範となるような一人前の人間になるべく努力をしている次第（つもり?）であります。

田中 徹（昭和60年卒・新35回）
日本電気㈱ 回路部品事業部開発部

研究や実験をする機会は殆んど無くなりましたが、大学で学んだ知識を活かして頑張っています。

辻 浩史（昭和60年卒・新35回）

住友スリーエム㈱

研究所内は花見時に桜の花が美しく咲き誇り、お昼休みにテニス、バレーなどのスポーツを楽しむことができるなど、環境は抜群です。現在私は、新入社員という立場上色々なつき合いに顔を出し、忙しい毎日を過ごしております。

荒井晴美（昭和61年卒・新36回）

三菱金属㈱

入庁以来1カ月が過ぎ、職場にも大分馴れて参りました。現在研修中で、講義を受けて報告書を書くといった大学時代と似た点もありますが、内容は殆んどが法律に関するものです。かなり四苦八苦しておりますが一日も早く仕事を覚えて、母校早稲田の名を上げようと頑張っております。

関 政立（昭和61年卒・新36回）

特許庁 審査第四部

今春卒業し、県立しらとり養護学校で教師をやっております。養護学校に決まった時は大変びっくりしましたが、現在はようやく生徒とも慣れ、忙しい毎日ですが元気でやっています。

化学の領域とは全く離れてしまい、ちょっと寂しい気もしますが、大学で培った精神は大いに役立っています。これからも頑張ります。

高戸孝司（昭和61年卒・新36回）

しらとり養護学校 教諭

以上のお便りは5月の定期総会時の返信ハガキに記載されていたものです。

卒業年は学部卒業時で、大学院修了時は省略してありますのでご了承下さい。

某機関の調査によれば、小学生で車内で老人や身障者に席を譲る者は諸外国では80～90％に達するのに、我が国では20％に充たないとのことである。この数字は私の日常見聞するところでは、恐らく中学以上の上級校生においても大同小異であろうと思う。

私は体調を乱して目下は杖を頼って歩いている。電車に乗れば立つのが辛いからシルバーシートに足が向く。ところが座席を占領している若者は「いやな奴が来た」と言わんばかりに、途端に読んでいた少年マンガ雑誌をパタリと伏せて狸寝入り^{マレ}を始める。稀に席を譲ってくれる者も居る。それが若い娘だったりすると不図、これぞ鶏群の一鶴、息子の嫁に欲しいなどと思う。だが、しかし、息子は既に35歳、3児の父親である。

ちなみに、朝夕の都バスの中では元気者がシルバーシートを占領する光景は余り見ない。これは随時アナウンスによって注意を喚起している為であろうか。

(M. M)

昭和61年度 定期総会

昭和61年5月22日(木) 於:大隈会館3階 1, 2号室

出席者……70名

本年度定期総会は去る5月22日(木)、70名のご出席を得て午後5時から大隈会館3階で開催されました。例年この時期は大隈邸園の無数のサツキが美しく咲き乱れるのですが、今年は低温が続いたためかほんの咲き初めたところでした。しかし一隅のバラ園はほぼ5分咲きで、様々な種類のバラの大輪、中輪が見事に咲き誇り芳香をただよわせておりました。

総会は岩城会長が議長となり、開会の挨拶の中で「本総会直前の役員会において私が会長に再選された」旨を述べました。次いで議案の審議に入り、会員のご熱心な質問もあって後上程された4議案はいずれも原案どおり承認可決されました。議事の中特別な事項としては、(1)期の前半低調であった会費納入状況は後半に入って好調を示し、予算に比して6%増収になったこと、(2)経費節減に鋭意努めた結果、事務費(人件費を含む)が10%節減されたこと、(3)超低金利時代を迎え、次期の利息収入は激減が予想されること、(4)名誉会員として棚橋幹一氏(旧制17回、日本化学工業株式会社、本会元会長)、篠原功氏(旧制18回、早大名誉教授、本会前会長)の両氏が承認されたこと等があります。

報告事項として、本年は役員改選期に当り、総会直前の役員会において会長及び監事の選出が行なわれて、いずれも現任者が重任となった旨を報告。更に副会長、理事、評議員については本総会終了時に就任することを条件として、あらかじめ会長より委嘱した旨を報告しました。

演 題 「社会革新と技術経営 — 21世紀の新産業への戦略 —」

講 師 内田盛也氏(帝人株式会社 理事、工学博士)

懇 親 会 (午後6.45~8.30)

司 会 百目鬼庶務理事

- | | |
|---------------|------------------------------|
| (1). 挨拶 | 佐藤副会長 |
| (2). 学内近況報告 | 佐藤副会長(応用化学科主任) |
| (3). 乾 盃(音頭) | 坂田 誠氏(旧制5回) |
| (4). パーティ | |
| (5). 新名誉会員挨拶 | 棚橋幹一氏(旧制17回)
篠原 功氏(旧制18回) |
| (6). 校歌斉唱(音頭) | 小沢喜久夫氏(D. C. 新制32回、酒井研) |
| (7). 閉会の辞 | 百目鬼庶務理事 |

以 上

総出席者の中、46年以降卒の会員のご出席が僅かに10名という状態はまことに寂しいことです。これからの企業を背負って立つ若い方々にとって「今後の企業戦略の基盤となる革新技術開発」は勉強の重要なポイントの一つであろうと思うのです。多忙な立場でしょうが、講演会には積極的に出席し、又その後の懇親会は先輩の意見を忌憚なく聞く絶好の機会ですから、今後の若い会員の多数出席を期待します。

講 演 会 (午後5.30~6.35)

講師紹介 (菊地庶務理事)

会 計 報 告

貸 借 対 照 表

(昭和61年 3月31日現在)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
現 金	426,768	運 営 資 金	9,170,000
郵 便 振 替	198,942	基 金	1,890,000
郵 便 貯 金	25,234	名簿刊行積立金	1,050,000
銀 行 普 通 預 金	426,332	前納会費預り金	2,573,850
貸 付 信 託	700,000	所 得 税 預 り 金	31,200
銀 行 定 期 預 金	13,000,000	次 期 繰 越 金	62,226
	14,777,276		14,777,276

収 支 決 算 表 (自昭和60年 4月 1日 至昭和61年 3月31日)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
前 期 繰 越 金	147,161	会 報 費	3,567,911
正・有志会員会費	5,428,000	名 簿 費	2,794,200
学 生 会 員 会 費	880,000	集 会 費	373,587
広 告 料	1,363,000	学 生 部 会 費	287,328
利 息	1,102,461	調 査 連 絡 費	27,470
寄 付 金	10,500	集 金 費	71,260
雑 収 入	734,000	支 部 費	100,000
名簿積立金取崩	600,000	用 品 費	30,180
		事 務 費	2,907,460
		雑 費	43,500
		次 期 繰 越 費	62,226
	10,265,122		10,265,122

小林奨学基金利息収支決算表 (自昭和60年 4月 1日 至昭和61年 3月31日)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
前 期 繰 越 金	1,138,423	教員研究教材費	1,020,000
貸付信託收益金	521,777	次 期 繰 越 金	648,861
普 通 預 金 利 息	8,661		
	1,668,861		1,668,861

基金総額 917 万円
使用済利息累計 748 万円

昭 和 6 1 年 度 予 算

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
前 期 繰 越 金	62,226	会 報 費	3,500,000
正・有志会員会費	5,100,000	名 簿 費	0
学 生 会 員 会 費	880,000	集 会 費	370,000
利 息	630,000	学 生 部 会 費	300,000
寄 付 金	0	調 査 連 絡 費	20,000
雑 収 入	227,774	集 金 費	70,000
運 営 資 金 取 崩	500,000	支 部 費	100,000
		用 品 費	30,000
		事 務 費	2,950,000
		雑 費	10,000
		予 備 費	50,000
	7,400,000		7,400,000

会 務 報 告

定 期 総 会

32ページ参照

編集委員の交代

役 員 会

日 時 3月18日(火) 午後5.05～6.50
会 場 大隈会館 3階 3号室
出席者 14名
議 案 1. 昭和61年度定期総会(日時, 会場, 議案)の件
2. 総会当日の開催行事の件
3. 役員の任期満了に伴う改選の件
4. 業務担当理事の報告

日 時 5月22日(木) 午後4.00～4.55
会 場 大隈会館 3階 3号室
出席者 16名
議 案 1. 任期満了に伴う会長選任の件
(現会長岩城謙太郎氏が再選され
重任)
2. 任期満了に伴う監事選任の件(現
監事小阪直太郎, 兼松貞雄の両氏
が選出され, 会長の委嘱により重任)
3. 昭和60年度事業報告
4. 昭和60年度決算承認の件
5. 昭和61年度事業計画並びに予算承認
の件

編 集 委 員 会

日 時 3月18日(火) 午後7.00～8.10
会 場 大隈会館 3階 3号室
出席者 5名
議 案 1. 会報3月号に関する反省
2. 会報7月号の編集企画
3. 会報11月号を(故)小林久平先生
追想特集号とする件

新任 長谷川吉弘(昭和45年卒・新制20回, 播磨化成工業株副社長)

退任 大林 秀仁(昭和42年卒・新制17回)
(以上61年5月22日付)

事務局員の交代

新任 小林 恭子 昭和61年2月24日付

退任 宮崎須美子 昭和61年2月20日付

ご 寄 付

鎮目 達雄殿(旧制16回) 10,000円 5月22日

岩城謙太郎殿(工経6回) 10,000円 5月22日

なお, 去る2月(故)小林久平先生の33回忌にあたり, ご遺族より本会「小林奨学基金」に対し100万円のご寄付がありました。

ご 逝 去

色川御胤殿(旧制3回・名誉会員)

昭和61年1月18日

岩岡正夫殿(新制6回) 昭和61年3月18日

児島俊夫殿(旧制20回) 昭和61年3月30日

西 直義殿(旧制24回) 昭和61年5月18日

岩崎 馨殿(旧制21回) 昭和61年6月1日

遠藤隆也殿(工経7回) 昭和61年

昭和 {⁶¹/₆₂} 年度 役 員 名 簿

(敬称略)

(会 長) 岩 城 謙太郎 (副 会 長) 菅 井 康 郎 小 林 禮次郎 佐 藤 匡 (監 事) 小 阪 直太郎 兼 松 貞 雄 (会計理事) 西 出 宏 之 (庶務理事) 百目鬼 清 菊 地 英 一 (編集理事) 酒 井 清 孝 逢 坂 哲 弥 (理事～学外) 中 岡 敏 雄 清 水 常 一 小 田 五 郎 中 谷 治 夫 本 田 尚 士 吉 田 稔 彦 吉 富 末 亘 柳 沢 孝 之 名 手 肇 萬 田 政 幸 大 橋 淳 男 竹 下 哲 生 村 山 榮 五郎	(理事～学内) 森 田 義 郎 加 藤 忠 蔵 長谷川 肇 鈴 木 晴 男 宮 崎 智 雄 宇佐美 昭 次 平 田 彰 (評議員～学外) 坂 田 誠 鳥 居 敬 文 竹 内 光 雄 神 原 周 治 照 井 總 彦 若 山 一 郎 鹿 島 次 郎 横 山 鹿之亮 堀 米 耕 平 桑 原 幸 二 進 藤 喜 信 春日井 佐 太郎 尾 立 維 恒 木 下 賤 雄 京 都 純 義 鴛 淵 晴 樹 小 場 豊 次 吉 島 哲 寧 種 村 哲 哉 阿久津 兼 二 小森田 藤 夫 犬 塚 克 已 太 田 昭 孝 高 野 良 徹 西 沢 清 茂 塩 沢 礎 信 高 橋 章 甫 田 中 宏 長谷川	牧 野 隆 明 阿 保 栄 司 大 原 定 夫 小 野 裕 二 山 崎 林 造 横 構 克 己 小 林 貞 次 川 口 史 郎 白 崎 正 彦 沢 田 祥 充 有 田 士 朗 赤 林 宏 川 合 善 三 光 井 武 夫 藤 田 耕 平 岡 本 三郎助 土 本 皓 二 荒 川 秀 夫 古 平 通 雄 木 邑 隆 保 松 本 俊 雄 飯 田 栄 一 川 島 利 夫 佐 藤 一 男 津 富 正 孝 斎 藤 儒 範 寺 内 淑 晃 大 矢 英 男 小松原 道 彦 大久保 則 良 二 瓶 公 志 野 元 成 晃 中 西 克 夫 松 山 喜 昭 金 子 勝 三 佐々木 健 二 国 分 可 紀 追 川 滋 篤 斎 木 彦 忠	風 間 弘 志 高 橋 志 郎 鷹 取 靖 明 田 中 和 明 伴 野 亟 計 得 能 通 亮 洪 谷 敬 一 新 井 泰 裕 佐 藤 裕 幹 篠 崎 開 行 安 斎 秀 純 棚 橋 一 典 赤 田 正 史 川 島 親 孝 重 原 淳 樹 小野崎 正 雄 中 村 泰 弥 熊 谷 俊 一郎 高 久 浩 一 麻 嶋 健 一 根 岸 直 樹 藪 本 周 邦 尾 上 薫 次 斎 藤 哲 泉 平 沢 潤 二 笠 井 正 紀 香 田 紀 章 菅 沼 紀 之 都 築 一 郎 横 田 昌 久 石 原 一 彦 岩 田 利 枝 松 田 宏 彦 黒 田 和 男 貞 野 利 栄 野 口 光 一 藤 城 昌 宏 米 山 愛 子	新 井 守 彦 若 杉 厚 溝 口 徳 実 村 木 孝 昭 渡 沼 幸 弘 町 野 彰 出 石 忠 彦 前 田 和 哉 (評議員～学内) 城 塚 正 高 宮 信 夫 土 田 英 俊 豊 倉 賢 黒 田 一 幸 清 水 功 雄 以上計 157 名 (編集委員) 酒 井 清 孝 逢 坂 哲 弥 本 田 尚 士 名 手 孝 之 萬 肇 太 田 政 幸 藤 本 瞭 一 西 出 宏 之 長谷川 吉 弘 村 山 榮 五郎 (10 名)
--	---	--	--	--

編集後記

●就職シーズンが巡ってきました。このところ景気が上向いているせいか、求人数も多く学生にとっては引く手あまたの売り手市場です。学生の就職希望先を聞いてみますと、TVでコマーシャルを流している企業が断然群を抜いています。昔は応用化学科を出ると化学工業に就職するのがあたりまえでしたが、今では半分に満たない有様です。化学工業も21世紀に向けて化学産業へと変貌しようと努力している時期で足繁く求人に来られますが、仲々御要望に応えきれないのが現状です。一

教員としてもどのように就職指導をしたものか頭の痛いところです。

●昨年10月に本会の庶務理事を仰せつかって自動的に本誌編集委員になりました。そこで庶務からのお願いを一つ。本会報をお受け取りになった貴方、会費の納入は怠りありませんか。本会ではある一定の規準を定め、会費納入状況の悪い会員には会報の発送を停止しております。近いうちこの規準がさらに厳しくなります。会費納入をお忘れでしたら、今すぐお払込みの程お願いします。

(菊地英一 記)

会費払込みのお願い

昭和61年度分会費の払込用紙を同封致しました。滞納ある方は60・61年の2カ年分となっております。

お忘れなき中にお早くお払込み下さい。かねかねお願い申し上げますように、1年分でも2年分でも、より多数の方々のご前納をお願い致します。前納者ご芳名は、皆様の備忘録をも兼ねて次号(11月号)に掲載させて頂く予定です。(但し、原稿締切りの都合上9月末までに到着分)。

なお、長年にわたって会費を滞納している方には会報をお届けすることが出来ないことになっておりますので、該当の方(通信文を同封)は至急ご送金下さい。

会報 編集委員会

委員長	酒井 清 孝
副委員長	逢坂 哲 弥
委員	本田 尚 士
〃	名手 孝 之
〃	萬 肇
〃	太田 政 幸
〃	藤本 瞭 一
〃	西出 宏 之
〃	長谷川 吉 弘
〃	村山 栄五郎

早稲田応用化学会報

昭和61年7月 発行

発行所 早稲田応用化学会

東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田大学理工学部内

電話 03(209)3211 内線5221

振替口座 東京9-62921 番

編集人 酒井 清孝・逢坂 哲弥

発行人 宮脇 正章

印刷所 大日本印刷株式会社

会費年額 2,500 円

振替口座 右の奥付ご参照